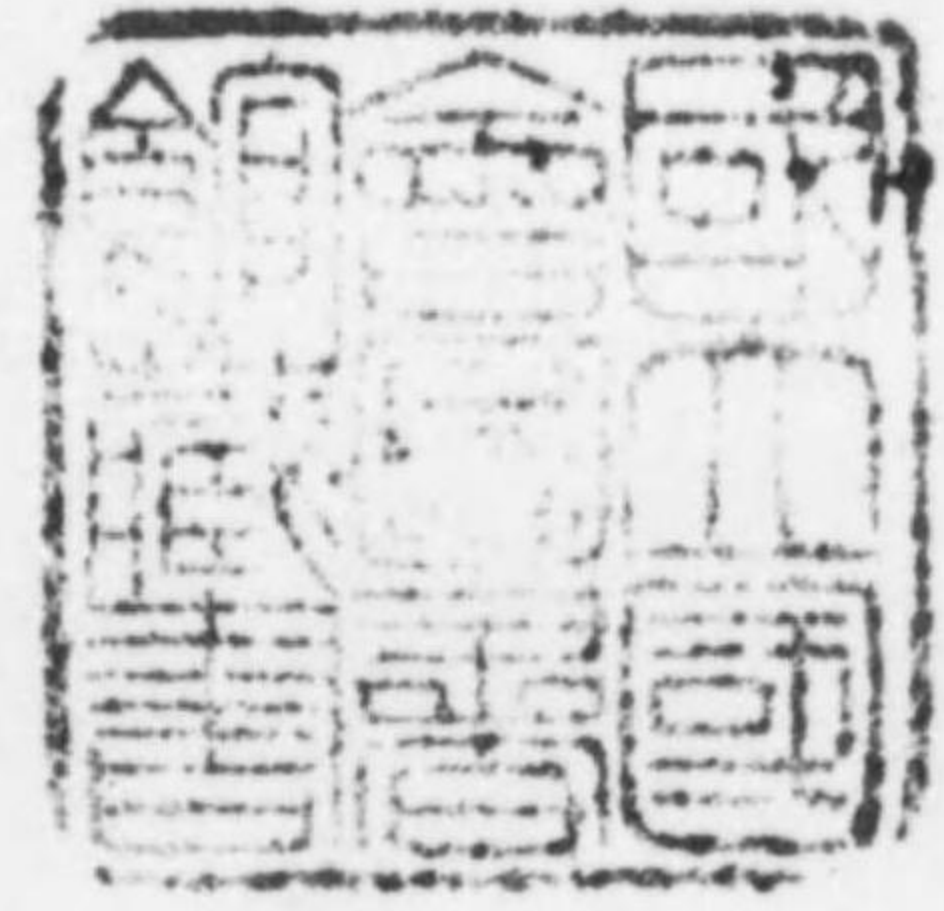


卅 20-14

最近清國動亂史

222.06
Ka641A



533154

著者及其筆蹟





著者及其筆蹟



222.06
Ka641A



533154



王風不競 民生未安 幼冲皇帝 天步艱難

王親醇王政攝國監前及帝皇統宣



王風不競 民生未安 幼冲皇帝 天步艱難

宣統皇帝及前監國攝政王醇親王



王親肅



王親敬



王親肅



王親敬



孫逸仙



袁世凱



黃興



黎元洪



孫逸仙



袁世凱



黃興



黎元洪

序

堯舜邈矣。禹湯茫矣。而春秋而戰國。蓋世之英雄騷興亡。而宇內歸
隆準。兒之有。鼎沸則三國分裂。則五胡。宋末以降。北方之強益加強
曰遼。曰金。曰元。皆北種也。現清朝以北種奄有天下。歷數將三百。蓋
屬異數。強努末勢漸弱。於是乎倒滿說。興漢議。風靡禹域焉。宜昌軍
南京兵磨劍而起焉。加藤法學士。通此間之消息太詳。揮椽大史筆
叙革命軍源委沿革頗備。嗚呼作史難矣。何必謂三長。我當與五畿
八道讀書子精讀本書焉耳。

辛亥臘月朔日

中橋德五郎識

序

宇内史乗の最も古きもの支那歴史に若くはなし而して西歐
獵漁の時代既に文物制度の燦然たるものありき周の文王禹
貢化外の地に興りて大に農桑を勸め仁政を施し政教の觀る
べきもの今古比なし斯の如くにして版圖益々擴張し統一の
王業全きを得たり曠古以來四千年治亂興亡の跡を繹ねんか
歴世英雄の事業、歷山、那翁の偉業と比し遜色なきもの少な
らず唯廣大萬里の版圖を維持し今日に至るもの蓋其淵源な
くんばあらざるなり

抑も支那の地たる一葦帶水にして古來善隣の國たり而して
我國經濟の發展は繋りて此國の貿易の消長如何に在り故に
彼が政治上の變革に對し我は實に利害關係者の最たるもの

なれば寸時も之が注視を怠るべからず頃者加藤法學士一書
を著はし老大帝國の治亂興亡の跡を論じ以て世に問はんこ
す其志の存する所亦以て知るべきのみ余は學士の勤勞に對
し深く敬意を表するものなり

明治四十四年十二月

小山健三

遙に加藤學士に寄す

天下は天下の天下にして一人の天下に非ずとは支那古來の政治思想に候、堯舜の禪讓は此思想を實現したるものにて候、爾後禪讓の制は實際に於て廢れたれども、其思想は或は識者の論議に露はれ、或は儒先の述作に見ゆ、常に四億衆の腦髓に沁み渡り居候、左れば一朝主權者の力の衰ふるに共に、此思想は直に現實の腕力と形を變じ候、現清朝の天下を支配するに既に二百七十年、其命數太だ短しと謂ふべからず、權勢の漸く凌夷するに共に、革命の急を叫ぶ者の簇出するは當然の次第に候、但、黃、黎等の革命派が今直に其目的を達し得べきや否やは、神ならぬ拙者共の豫知する所には無之候へ共、四百餘州に磅礴する非君主的思想が、其形を變ずべき時節に到達し

たることは疑ふべからず候、陳、吳の出づるは、聽て羸、劉を生むの前兆にあらずや、拙者は黃、黎一派の興亡は必ずしも介意するに足らずして、別に大に考究を要するものありと存候、高見果して何如

十二月五日

法學博士 戸 水 寛 人

梶原日銀支店長の書信

拜啓

此度清國動亂史御著述の上自費御出版のやう御報に接し近頃御奇特之事と嘆服仕候清國革命の由來に就ては新聞雜誌競ふて記述する所有之候も其多くは斷片に過ぎずして之を一纏めにして吾々日常俗務に追はれつゝある輩に冬夜火を剔つて一氣に其由來を領會せしむるご云ふ重寶なる編著なきは遺憾と存居候ひしに貴兄の御骨折にて近日吾々の渴を満たし得ること、刊行の日の一日も早からんことを祈居る次第に御座候

世界第一の老大帝國に起れる革命の前途を豫測することも興味乏しからず候も小生は其れよりも其由て來る所を精確

に調査し而して之をば眞面目に研究する方却つて興趣の津々たる外に裨益の大なるものあらんかご愚考仕候清國人が何が故に從來の政體に甘んぜずして何等かの變革を望むに到りしか、政治の要は徳化に在り、這次の變亂の來る、必ずしも世に道ふ排滿興漢なる單純なる理由にあるものごは信じかね候小生は是等の疑義をば貴著によつて十二分に領會致度候 敬具

十二月六日

梶原 仲治

加藤 様

侍 史

片岡瓦斯會社長の書信

拜啓

此度清國の近狀に慨せられ病間筆を呵して最近清國動亂史御編述なされ候由時節柄至極結構なる御作物と被存密に喜び居候今更小生が申上る迄もなく支那は革命易姓二十幾度とは云へ何と申しても四千年來歴史に富める大帝國にして四億の民族を包容する點のみにても世界無比と申すべく若し上に有徳の大人物ありて仁政を布き候はゞ縦し革命思想漢人間に傳播されたりとも今日の如き大動亂を見るに至らずして能く大民族の融和團結せる大帝國の權威と面目を保ち得たりしならんご小生は清國の爲に深惜措かざる所に御座候

清國の前途に關しては茫として殆んど何人も豫測し能はざる事と存ぜられ候も其變化に富み波瀾の妙を極めたる動亂の由來する所をば仔細に研究し而して之を現在に照らし延て以て將來をも警むることは必要事と相信じ候貴著の眞意も亦或は卑見に合するものあらんには小生の満足無此上次第に御座候時下寒冷日に加ふるの折柄爲邦家御加養自重是祈候

敬具

十二月八日

片岡直輝

加藤正雄様
侍史

岩下北銀頭取の書信

拜復

益御清勝の段奉恭賀候却説此度清國の近狀に付て深慨せられ御病中清國動亂史の一篇御著述有之候由洵に結構の事と存候貴著結論中に「我實業家に至つては其利益損害常に清國の治亂と消長す果して然らば吾人實業家たる者清國官民治亂の往を尋ね來を推し以て不時の用意と之が救濟の法を考へざるべからず」云々とあるを拜見し至極御尤の御論旨と存候貴著また此趣旨によりて生れしものこそせば其實業家を裨益する大なるべしと信じ候序文差出すやう仰入れに候も不文小生如きもの、

文章は却て貴著を瀆すの虞れ有之候まゝ、差控へ申候へば此義不惡御諒承被下度願上候不取敢貴答まで 敬具

十二月十四日

岩 下 清 周

加 藤 様

侍 史

犬塚明府よりの書信

拜復、今回最近清國動亂史御著述の趣、今や中清の動亂は清國と最も利害の關係を有する我が邦人の決して等閑視すべきにあらず此時に方り最近清國動亂に關する貴著の如きは洵に時機に適したる好著と存候未だ篤と拜讀の榮を得ず候得共定て一般讀者を益すること多かるべしと存候右貴著に對し聊か一言を呈し度如斯に御座候勿々

十二月十五日

犬塚勝太郎

加藤學士
侍 吏

自序

西隣火を失して東隣之を知らず、知て而して袖手傍觀することせば此理なき也、今や隣邦政を失し十八行省亂れて麻の如し、此時に當りて最隣に位せる帝國臣民たるもの、對岸の火災以て之を見んには西隣の火東隣知らず知て而して傍觀するに庶幾からん乎、頃日時事に感ずる所あり此書を著して大方の瀏覽に供す、若し夫れ行文の蕪雜と史料の貧弱とは一は非才識薄きにも由ること雖も一は短時日に起草せしにも因せずんばあらず、讀者責めずして可なり。

明治辛亥十二月

法學士 加藤 正雄

例言

一 本書先輩知名諸賢の推獎する所となり、序文の高賤を蒙りしは、著者の深く光榮とする所なり、排列次第は高文接手の順序による、敢て他意あるにあらず、請ふ諒焉。

一 本書著述の材料は主として之を新聞雜誌に取り、更に専門支那通の學者に聞く所あり、多くして雜ならんよりは、簡にして精ならんことを期せり、深く各新聞雜誌に感謝す。

一 行文勿々、印刷も亦速成を期せし爲め、魯魚焉馬の誤も多かるべく紙質体裁亦意を凝すに迫なし、再版の日を待て訂正増補する所あらん

辛亥十二月

著者 識

目次

第一章	序說	一
第二章	支那二十一日	六
第一	支那本部	七
第二	滿州	七
第三	蒙古	七
第四	西藏	八
第五	青海	八
第六	新疆	八
第七	奉天省	九
第八	吉林省	九
第九	黑龍江省	九
第十	直隸省	一〇
第十一	山東省	一〇

第十二	山西省	一一
第十三	河南省	一一
第十四	江蘇省	一二
第十五	安徽省	一三
第十六	江西省	一三
第十七	陝西省	一四
第十八	甘肅省	一五
第十九	福建省	一五
第二十	浙江省	一五
第二十一	湖北省	一六
第二十二	湖南省	一七
第二十三	四川省	一七
第二十四	廣東省	一七
第二十五	廣西省	一八

第二十六	雲南省	一八
第二十七	貴州省	一九
第三章	武昌と漢陽及漢口	一九
第四章	張之洞の訓練せし新練軍	二四
第五章	革命の歴史	二九
第一	黄帝	二九
第二	帝舜	三〇
第三	夏	三〇
第四	殷	三一
第五	周	三一
第六	春秋	三一
第七	戰國	三二
第八	秦始皇帝	三二
第九	漢高祖	三二

第十	漢末の革命亂	三三
第十一	後漢末の革命亂	三四
第十二	六朝暗黒時代	三五
第十三	唐末の秘密結社	三六
第十四	宋の梁山泊	三七
第六章	現今の秘密結社	三八
第一	白蓮會	三九
第二	三合會	四〇
第三	哥老會	四一
第四	革命	四二
第七章	清朝廷と革命亂	四二
第一	湖北の白蓮教匪	四二
第二	臺灣の三合教匪	四四
第三	清水會員の處刑	四五

第四	李文成の天里教匪	四五
第五	嘉慶の三合會員處刑	四七
第六	猺族の亂と三合會	四七
第七	鴉片亂と三合會の進歩	四八
第八	長髮賊の亂	五〇
第九	長髮亂十五年間の三合會	五九
第十	同治の回匪	六二
第十一	寧山の三合軍	六三
第十二	哥老會の隠謀メーソン事件	六三
第十三	五軍山の哥匪	六四
第十四	清國革命黨の廣東城の失敗	六四
第十五	大刀會獨逸の餌となる	六六
第十六	各秘密結社の連絡	六七
第十七	廣東の三合匪	六八

第十八	義和團の北清事變	六九
第十九	哥老會漢口の敗	七〇
第二十	革命黨、三合會聯合の惠州亂	七〇
第二十一	中國同盟會の成立	七四
第二十二	滿州馬賊と白蓮會	七五
第二十三	馬福益の再舉	七五
第二十四	湖南の暴動	七六
第二十五	徐錫麟、秋瑾女史の死	七六
第二十六	廣東省城の暴動	七七
第二十七	南清志士多し	七八
第八章	今次辛亥の革命亂	八一
第九章	清國現今の人物	九四
第一	故曾國藩	九四
第二	袁世凱	一〇一

目次 六

第三	孫逸仙	一〇二
第四	黃興	一〇二
第五	黎元洪	一〇三
第六	湯化龍	一〇四
第七	康有爲	一〇五
第八	盛宣懷	一〇七
第九	岑春煊	一〇九
第十章	清國政局の前途	一一一
第一	醇親王の攝政辭職	一一一
第二	今後の政局	一一二
第十一章	結論	一一五

目次 終

目次 七

最近清國動亂史

法學士 加藤正雄 著

第一章 序 說

斬木爲兵、揭竿爲旗、天下雲集、響應、贏糧而景從、山東豪俊、遂並起而亡秦族矣。賈生
が秦の興亡を論せしより、今に殆ど二千年、支那歴代の隆替常に此雷同的雲集響
應に依らざるなきは、東西の歴史唯彼に於てのみ特有する所、今茲辛亥の動亂亦
此種の演劇を繰り返せしに過ぎず、是に於て乎、叛亂武漢に起れば、天下響應し、官
軍漢陽を復すれば、天下亦響應し、而して南京革軍に陥らるれば、天下亦復之に響
應す。

周八百年、秦十二年、漢四百年、六朝併せて三百五十年、唐三百年、五代併せて六十年
宋三百年、元八十年、明三百年、清は今日まで二百五十年、老大帝國の革姓易名、雷同
を利用せしものは、常に新建國の主權者となる、之を上にして舜、禹が諸侯朝覲者

に謳歌せられたる之を下にして黎元洪が造作もなく大都督となれる、酷言すれば皆此雷同的人民を利用したる賭博なるらし。

之を近時の時事に徴するも、些細なる辰丸事件の爲に一夫日貨抵制を絶叫すれば、天下翕然として之に従ひ、拒款運動一たび提倡せらるれば四方争ふて響應し、國會速開論起れば二十省靡然として之に趨り、湖北一個師團の兵叛すれば十八省に獨立の聲起る、而して彼等は排貨の理由は何若、拒款の必要は何れにあるや、何が爲の國會、何が爲の獨立、此等の根本問題は一切之を知らざるもの多く、唯雷同附和して往々大事を爲す。

而も此雷同や江戸ッ兒風の飛び上りにあらず、極端なる自己本位より割り出したる雷同なり、何事も同天下之利者則得天下、擅天下之利者則失天下の語より算定する勘定高き國柄として治亂ともに分りが早く、扱こそ四億生靈の動亂も日本人が感ずる程の苦痛ならざるは事實也。

已に治亂共に分りが早くして雷同附和すること燎原の如き國民なり、是に於て乎動亂は決して一二回にして止まらず、勢に附き利に趨る支那人の特性が依然

たる限り、一亂治まれば一亂生じ、支那が立憲君主政、共和政何れか一方に統一せらるゝには猶若干の年時を費すべからんことを信ず。

滅滿興漢は南清志士の聲明なるべし、共和政体は新智識者の旗幟なるべし、然れども梁山泊的の豪傑、苦力的の兵士に迄此聲明旗幟が了解せられ居るや否やは疑問なり、此時に於て徒らに文明の假面を被れる政治組織にのみ拘々として、以て利害を知るに敏なる支那人心を鎮撫せんとするの策は、我れ未だ人心を満足せしむるの道にあらざるを危ぶむ。

聞く武昌革命軍の敗戦、南京城攻撃の緩漫皆悉く八百長にして、袁世凱幕下の楊度と革命側の汪兆銘が發起となり、時事協濟會なるものを起し、各省の代表者を天津に會して多數決によりて政体採用の決定を爲さんとし、政府亦已に各省代表の召集を宣言したれば、今後の大勢略定まり、老大帝國は一變して共和國となるの時機近からん。

これ實に慶事なり、然れども支那が國体を變ずるによりて従來より堅牢なる政治機關を備へ得べしと思へば早計なり、内亂これより起らざるべしと思へば更

に早計なり、今回動亂の導火線或は滅滿興漢の人種的反目にありしならん諸生が共和政治を夢みたりしにもよるならん、然れども其根本原因は清國朝廷財政經濟の不如意と、地方官吏の暴逆にあり。

自由平等の政治論を提げて革命の目的とするは已に十七世紀に於て終結せし問題なり、近時世界の流行となれる革命は墨其西哥にまれ、葡萄牙にまれ、土耳其の躍起、波斯の運動にまれ、其源に遡れば何れも皆外國の壓迫、即ち外債の負擔より生ずる財政經濟の不如意より生ぜざるものなし、而して支那は古來より天下非一人之天下、乃天下之天下也、同天下之利者則得天下、擅天下之利者則失天下の語を標準とし、悠々五千年の興亡、多くは經濟上の理由に原づかざるものなきに見て、其歴史的素養と世界の風潮に察すれば亦其真相を知り難からざるべき乎、且清國今日の疲弊困憊と外國の壓迫日に甚しきとは何人も目視する所、十數億の外債、之が償却の基金たるべき租税には逋者多くして、負債償却の見込に窮し遂に外國に壓迫せられて借款となり、擔保の名にて利源を押收せらる、是に於て之が整理の最善方法として租税を加重せんとすれば、國民怒つて苛税誅求を叫

ばんとし、手を拱して成行に任せんとすれば、國益貧しくして革命男兒得たりと之に乗せんとす。

此國家危急存亡の秋に當つて、地方の官憲徒らに私福をのみ圖り、往々土地の富豪に課するに一八幾萬兩の御用金を以てし、命に應せざれば之を族す、官吏の暴逆此の如し、動亂一たび起れば雲集響應して自己の爲に利ならんとする人に加擔すべきは無理ならざるなり。

事情業已に斯の如し、今次官革兩軍休戦の間に雙者の交渉進行し、一時的平和の段落を告ぐるごあるも、并は段落に過ぎざるを以て、立憲君主政、共和政体、其何れに決するを問はず、これによりて永久の平和を獲得し、從來より富強なる新國家を形成し得べしとすれば甚しき誤解なり、段落は終結にあらずして中間なることを忘るべからず、清國地方官吏の秕政が改まらざる限り、中央政府の疲弊が回復せざる限り、清國の内亂は之を根治するに難かるべきは自然の數なり。

若し清國の内亂にして漢末唐初の頃の如く我國と風馬牛ならんか、吾人は注意の必要少なかるべしと雖も、今や清國は我國と一葦帶水を隔てたる最隣國にし

て其一興一亡は我國經濟の消長に影響す、況んや虎視眈々たる列國は爪を磨き牙を鋭にして其衰弱に乗じ、十八省を割て食はんとするをや。之によつて見れば隣邦支那の現在將來に横はれる幾多の難問題は、悉く我國に影響すべき難問題なり、特に其經濟問題が我國に及ぼすべき影響は更に一層の甚しきものあり、世の實業家たるもの往を稽へて來を窮め、以て支那問題に就ての用意を怠るべからざるは蓋し刻下焦眉の急務なり、請ふ以下支那動亂の史實を叙して、以て支那研究の參考に資せん。

第二章 支那二十一日省

清國動亂の歴史を略叙せんごすれば、順序として先づ清國二十一日省の組織を叙せざるべからず。

清國の地、北緯十八度十三分より五十六度四十分に亘り、東經七十一度五十一分より百三十三度五十二分に達し、總面積四百二十七萬七千七百七十方哩、人口四億三千三百五十五萬三千〇三十名を有す、暫く之を支那と稱するも、更に細別して

支那本部、滿洲、蒙古、西藏、青海、新疆の六に分つ。

第一 支那本部

支那本部、乃ちこれ上下五千年東亞文化淵源の地、所謂中華にして、今次の革命軍が自ら稱して漢族といふものは是なり、北は蒙古に接し、西は土耳其斯坦、西藏、西南は緬甸南は佛領東京及び東京灣に接し、東南は南支那海、東は黃海、渤海灣に臨み、面積百五十三萬二千四百二十方哩、人口四億七百二十五萬三千三十名を有し、支那全領土人民の九割強、悉く此地に住し、國內を十八省に別つ。

第二 滿州

滿州は支那帝國の東隅にありて、愛親覺羅氏發祥の地、國內を三省に別ち、本部の十八省に對して東三省といふ、總面積三十六萬三千六百十方哩、人口約千六百萬

第三 蒙古

蒙古は支那本部の北部に位して、南は萬里の長城を以て支那本部と境し、東は滿州に接し、西は露領及び新疆省と相連り、北は西比利亞を控ゆ、面積百三十六萬七

千六百万哩の大あるも、人口僅に二百六十萬人、有名なるゴビ大砂漠中央に横はつて東西に延び、廣袤八百里、砂漠の北を外蒙古、南を内蒙古といふ。

第四 西藏

西藏は世界の秘密國として知らるゝもの、世界の最高原にありて高さ平均一萬五千尺、崑崙、ヒマラヤの兩山脈を以て印度と境し、國內を前藏、後藏の二部に別つ、總面積は青海を併せて約四十六萬三千二百方哩、人口約六百四十三萬と稱せらる。

第五 青海

青海は、甘肅省、西藏、新疆の間に介在する地方にて、人口僅に十五萬餘、東北隅に青海と稱する大鹹湖あるによりて、此邊一帯を青海といふ。

第六 新疆

新疆は支那帝國の西北端にあり、古昔漢唐の時世、印度への通路として知られたる天山々脈、其中央を横斷して此地を南北の二部に別ち、北を天山北路といひ、又ズンガリヤともいふ、南は乃ち天山南路にして、東土耳其機斯坦とも、支那土耳其機斯

坦ともいふ、支那邊疆の要鎮たる伊犁は實に天山北路の西北端にあり、新疆の面積五十五萬三百四十方哩、人口凡そ百二十萬と稱す。

以上は支那全土の大別なるが、上來諸地の中なる滿州及び支那本部、これ清國の中樞なるを以て、其十八省と東三省を見んは、強ち無用の事にあらざるべく、東三省とは滿洲の奉天、吉林、黑龍江の三省を指す也。

第七 奉天省

奉天省、又の名は盛京省、清朝發祥の地にして、又日露戰役の新戰場たり、滿州唯一の瀕海洲にして、遼東半島は其南方の突角なり、首府奉天は瀋河の陽にあるを以て、又瀋陽ともいふ、面積約六萬方哩にして、人口七百萬に達す。

第八 吉林省

吉林省は奉天省の北にありて、松花江中を貫き、南に長白山を控ゆ、面積十一萬方哩、人口約六百萬。

第九 黑龍江省

黑龍江省は滿洲の西北部にあり、東三省中面積の最大なる地、廣袤十九萬方哩、人

口約三百萬其大半は不毛の地なり。

以上の三省猶漢人の所謂夷狄にして、滅滿興漢の標的となる、而して黃帝以來の所謂中華なるものは實に、左に列擧する十八省なり。

第十 直隸省

直隸省は古幽薊の地、北は長城外に於て内蒙古と境を接し、南は山東、河南の兩省、西は山西省に接し、東は海に臨む、面積十一萬五千八百方哩、人口二千九十三萬七千人、北京、天津皆此省にあり、形勝天下に甲たりと稱せらる、此省禹貢に所謂冀州の域にして、首府を堯の時は幽都といひ、周には幽州、秦には上谷、漁陽の地、漢には廣陽、又は燕國、晉唐には范陽、宋には燕山、明には順天といひ、清朝茲に都して北京といふ、而して此地は遼、金、元の舊都なり、二千六百年前春秋の時、燕此處に都して國を治む、燕昭王の塚今尙在り、荆軻が秦王を刺さんが爲に太子丹に訣別せし易水は固安にあり。

第十一 山東省

山東省は威海衛を英國に、膠州灣を獨逸に租借せられしを以て有名なり、北は直

隸省及び渤海灣に接し、東部は黃海に突出して所謂山東半島を形成す、面積五萬五千九百七十方哩、人口三千八百二十四萬七千九萬人、禹貢青州の域にして春秋の時、齊、魯の舊域なり、孔子は昌平城に生れ、孟子は鄒に生れて道を天下に傳ふ、伏羲の廟あり、女媧の陵あり、堯を曹州に葬り、湯を曹縣に葬る、若し夫れ秦末の英雄、力山を抜く項羽の墓も亦此省東阿といふ地にあり。

第十二 山西省

山西省は直隸省の西にあり、北は陰山々脈を隔て、蒙古と境し、省内山岳巍々として平原少なく、地味亦貧劣なるも、禹貢の所謂冀州の域にして、夙に用武の地と稱せられ、唐虞及び夏は實に茲に都す、周成王幼弟叔虞を封せし所にて春秋の雄國、晉の故地なり、戰國には趙に屬し、秦の時、首府を晉陽といひ、漢には太原、唐には西京、宋には河東、明には太原といふ、乃ち今の太原府也、此省面積八萬千八百三十方哩、人口千二百二十萬四百五十六。

第十三 河南省

河南省は禹貢の兗、豫二州の域、北清の中央に位して四通八達、古の所謂九州の河

南あるは猶一身に腹心あるが如きもの蓋し支那文化發祥の地にして六萬七千九百四十方哩の地に三千五百三十一萬六千八百人の多數を包容し人口の稠密なること十八省中第一に居る其開封府は春秋の時鄭衛陳の境にして戰國の時魏此に都して大梁といひ漢には陳留郡唐には汴州といひ宋は實に此に都す明の時開封と改めてより今も亦開封と稱せり

別に河南府あり古の洛陽是なり周の武王殷に克ちて鼎を郊鄂に定めし後成王洛を營んで王城の下都となし平王鎬京より東遷して王城に居る是を洛陽といふ東漢及び晉は共に此に都し隋煬帝亦都を此に徙す元の時河南と改めてより今も亦河南と稱す洛陽城址は府城の東洛水の北にあり即ち周公が營築せし成周なり

第十四 江 蘇 省

江蘇省は北は山東省に接し東は黃海に臨み西には大運河南北に貫通して南方には揚子江を控ゆ中清第一の要地にして面積三萬八千六千方哩人口千三百九十八萬二百三十五揚子江口貿易の要津として各國の約により中立地帯と稱せ

らるゝ上海は實に此省にあり

江寧府は即ち南京にして禹貢揚州の域春秋には吳に屬し戰國には越に屬し終に楚に屬す此都一に金陵とも名くるは楚の威王此地王氣あるによりて金を埋めて之を鎮め因て金陵邑を置きしに因す三國の時吳京口より徙つて此に都して建業といひ晉には建康といひ東晉には丹陽といひ六朝の時多く此に都し南宋の時此地に徙つて復建康といひ朱明三百年實に此に都して江寧といふ五十年前長髮賊が太平天國を建てしも此地にて今次の動亂將軍張勳をして名を成さしめしも亦此南京城なり

第十五 安 徽 省

安徽省は明の時江蘇省と共に南直隸省なりしを清興つてより南直隸省を廢して二省となせしものゝ一なり江蘇及び浙江の西に連り揚子江其南を流る面積五萬四千八百十方哩人口二千三百六十七萬三百十四禹貢揚州の域にして春秋には有名なる吳國なりしが戰國の時楚に屬す

第十六 江 西 省

江西省は北は長江によりて安徽湖北の二省と境を接し、東は浙江福建と相連り、南は廣西省北は湖南省に接す、古の所謂吳楚閩粵の交に當り、地瘠而窄、民悍にして争ふと稱せられしもの、面積六萬九千四百八十方哩、人口二千六百五十三萬二千百二十五、禹貢揚州の域にして漢の豫章の地なり。

第十七 陝西省

陝西省は支那本部の西北部にて北は内蒙古に接し、南は湖北四川の兩省に連り、山岳嵯峨として所々に蟠屈して渭水其中央を貫く、面積七萬五千三百七十方哩、人口八百四十五萬八十二、山河四塞形勝天下に甲たりと稱せらるゝもの、禹貢雍州の域にして首府西安府は、周武王が都せし鎬京にして所謂王畿の地これなり、秦には咸陽といひ地を關中と稱す、周、秦、漢、晋、西魏、後周、隋唐、並に此に都す、長安の名は漢代に命じ西安の號は明之を命ず、省内最も古蹟に富む、沛公の鴻門亞夫の細柳、諸葛孔明の五丈原を聞けば腕鳴り肉躍るの感を禁ずる能はず、長樂宮、沈香亭、未央、建章、華清の諸宮及び朝元閣の名を聞けば人をして坐るに、鬢亂釵橫、海棠睡り未だ足らざるの貴妃を偲ばしめ、馬嵬坡を看るに及では轉た宛轉たる蛾

眉馬前に死し、花鈿地に委し人の收むるなし、翠翹金雀玉搔頭、君王面を掩ふて救ひ得ずの恨を緬想せざるを得ず。

第十八 甘肅省

甘肅省は明の時陝西省の一都たり、青海、新疆と境相接し、北は長城を隔て、内蒙古と相對し、南は四川に境す、面積十二萬五千四百五十方哩、人口千三十八萬五千三百七十六、秦漢の時所謂巴蜀の一部なり。

第十九 福建省

福建省は海を隔て、遙に我臺灣と相對し、北清事變の後清國をして不割讓を約せしめし地なり、面積四萬六千三百二十方哩、人口二千二百八十七萬六千四百五十、禹貢揚州の域にして周には七閩の地たり、漢の時閩越王、此に都す。

第二十 浙江省

浙江省西は安徽及び江西の兩省に接し、東は海に臨む、面積三萬六千六百七十方哩、人口千百五十八萬六千九百九十二、禹貢揚州の域にして春秋の時吳に屬し、後越の有となる、越王勾踐が困められし會稽山は實に此省にあり、首府杭州府は古の所

謂錢塘、宋の時内翰蘇東坡先生が出で、知たりし杭州府は乃ち是れ、水光潑艶晴
偏好、山色空濛雨亦奇、若把西湖比西子、淡粧濃抹兩相宜、と歌はれし西湖は城府の
西にあり、碧嶂高くして、亢ならず、清波渾とし、濤たゝす、郭を出る數武ならざる所
疊竹省會の間に位して、澄泓一鑑、人の鬚眉を照し、蒼翠たる數峰、我が几席を圍む
柯に攀づれば、歩々兩峰三竺、南屏孤嶼の奇を收め、櫂に隨へば、濯々六橋十錦、湖心
花港の勝を躋る若し、夫れ飄逸の士、楫を鼓して、題を分ち、葛洪藥爐の丹井、林和靖
の鶴子梅妻、白樂天の詩品、東坡の文章、岳武忠公の忠烈を詠じ、風流の士、畫舫繡箔、
西子の佳麗、蘇小々の艶俠を訪は、情の鍾まる所、夫れ何如ぞ、清國に遊ぶものは
西湖を覽ざるべからざる也、況や南宋嘗て都せし舊都なるをや。

第二十一 湖 北 省

湖北省湖北は今回革命亂の源泉地、南は湖南省に接し、北は河南に連り、又四川、江
西、安徽の三省に隣り、實に支那の中原なり、面積七萬千四百十方哩、人口三千五百
二十八萬六千八百八十五、其稠密なること、支那十八省の第三位にあり、武昌は本省に
して亦革命軍の本營なれば、次章に於て詳叙せんと欲す。

第二十二 湖 南 省

湖南省は明の時は湖北湖南を併せて湖廣省といひしを、清に迨で南北に別ちし
ものゝ一なり、禹貢荊州の域、春秋戰國には楚黔中の地たり、長沙は其首府にして
洞庭湖は岳州府の左にあり。

第二十三 四 川 省

四川省は十八省中最大の一省、面積二十一萬八千四百八十方哩、人口六千八百七
十二萬四千八百九十人、我邦全領土全人口よりも猶廣くして多し、西は雲嶺山脈
を隔て、西藏と境し、南は雲南、貴州に接し、東は湖北と相隣し、北は秦脈の連山重
疊す、沃野千里、天府の地、一夫之を守れば、萬卒攻め難き所なり、禹貢梁州の域、秦に
は蜀といひ、漢には益州といふ、三國の時、劉備據りて、以て蜀の國を建つ、首府成都
は當時の國都也。

第二十四 廣 東 省

廣東省は支那の極南にあり、西南の一部は佛領、東京と接し、其餘は廣西、湖南、江西、
福建の諸省に隣る、面積九萬九千七百七十方哩、人口三千一百八十六萬五千二百五

十一、禹貢揚州の南境、春秋には南越地たり、苗人種の根據として、慄悍の族多く、山獠海舶常に疆場の害を爲すといはれし地なれば、にや、今猶支那革命黨の多くは此省に産し、現に今回の革命亂は、今春首府廣東省城の失敗を含みしもの、企に出しは人の知る所なり。

第二十五 廣西省

廣西省は廣東の西北に位して、西は雲南及び佛領東京に接し、四面山岳を以て繞らし、中央は丘陵性の平野をなす、氣候炎熱激しく、蕃地の觀を呈し、風壤氣習廣東に同じからず、蓋し、猺童多くして、編氓少なければなり、面積七萬七千二百方哩、人口五百十四萬二千三百三十、大舜遠征して崩せし蒼梧の野は、省内梧州蒼梧縣にあり、禹貢荊州の域、春秋百粵の地たり。

第二十六 雲南省

雲南省は支那本部中最も僻陬にあるの地、北は四川省、東は貴州、廣東省、西は西藏及び緬甸南は佛領東京と境を接す、禹貢梁州の地、春秋に填國といふ、明の時始めて支那本部の一に屬す。

第二十七 貴州省

貴州省は四川省の南方にあり、面積六萬七千六十五萬方哩、人口七百六十五萬二千八百八十二、禹貢荊梁二州の南境、古の西南夷羅施鬼國なり。

第三章 武昌と漢陽及漢口

十月十日の夜、武昌の歩兵隊突然暴行を企て、總督衙門及び布政衙門を襲撃して、燒棄す、これ乃ち今次動亂の發端なり、武昌とは何若なる所ぞ。

武昌は古來天險の地、中原鹿を爭ふの要津たり、東は江西省九江府瑞昌縣に界し、西は漢水を隔て、漢陽府漢陽縣に相對し、更に江を隔て、漢口港と鼎足の形を成す、南は岳州府に界して、湘縣に臨み、北は東坡が曾て貶せられて、知たりし黃州府に對す、所謂江漢を池となして、吳楚を襟帶し、地津要に居るもの、是也、禹貢荊州の域、周の時楚に屬し、楚の熊渠其子紅を封じて、鄂王と爲せしより、始めて鄂諸と名く、春秋には夏納といひ、秦には南郡に屬し、漢には江夏といひ、三國の時吳此に都して武昌といひ、劉宋の時郢州といひ、隋唐の時鄂州といひ、宋も亦鄂州と稱し

元より今に至るまで武昌といふ、實に湖北一省の中樞たり、古來湖北一省の嚮背天下の大勢を左右せしこと一にして足らず、春秋の時湖北を中心として周鼎の輕重を問ひたる楚、赤壁の一戰、曹操の大軍を鏖殺せし孫權は言ふまでもなく、元末に黃州より起り天漢と稱せる徐壽輝、素徐の臣にして獨立して漢と稱し、明の大祖に滅されたる陳友諒の如き、皆一時中原を擺撼せざるものなし、特に長髮賊が長沙を圍みて岳州を陥れ、遂に武昌、漢陽を下し、漢口鎮を焚き、鱗艦萬艘、帆幟江を蔽ふて下り、遂に金陵(南京)を奪ふて之に據りし後、武昌、漢陽の地幾たびも官賊兩軍の爭奪となり、湖北巡撫胡林翼最後に恢復して此地を官軍の根據地となすに及で、遂に髮賊鎮定の功を奏せしに見て、以て此地が如何に兵事に重要なるかを知るべき也。

江漢を池となし、吳楚を襟帶せる武昌の天險は支那五千年中最も壯快にして、且三國誌によりて兒童走卒にまで知られたる赤壁の一戰、詩趣と興味の汪洋たるを見る、當時曹操已に劉備を走らして、水軍八十萬、兵を江陵に進め、江に順つて將に東下せんとし、槩を横へて詩を賦し、月明かに星稀に、劉備を烏鵲に喩へて其南

飛を狀して木を繞る三匝といふ、何等の得意ぞ。

而も孫權一たび諸葛孔明の説を容れ、其將周瑜をして水軍を帥いしめ、黃蓋東風に乗じて船を焚き、火烈しく風猛に、船疾き事、箭の如く北船を焼き盡して、延て岸上の營に及び、人馬燒溺して死する者甚だ衆く、北軍大に潰へ、曹操兵を引て華容道より歩走し、僅に免るゝに至ては何等の失意ぞ、杜樊川詩あり曰く、折戟沈沙鐵半銷、自將磨銑認前朝、東風不與周郎便、銅雀春深鎖二喬、高青邱が共憑花兒倦新妝、玉女陰符讀幾行、銅雀何能鎖春色、解將奇策教周郎と詠するに及では、千古殺伐の事、還た一段の風流韻事となる、更に鄭允端の燒天烈火萬艘空、橫槩英雄智力窮、何似偏舟今夜客、洞簫聲在月明中、又文天祥の千古高情坡老賦、東風誰更說周郎の句を讀に及で、英雄畢竟這の東坡一衰翁に及ばざるを一嘆す。

客あり曰く、長江漢水の間、赤壁なる者五あり、漢陽、漢川、黃州、嘉魚、江夏と、東坡の賦西夏口を望み、東武昌を望めば、山川相繆ふて鬱乎として、蒼々の句あれば、黃州赤壁の赤壁に遊びしや知るべし、赤壁古戰場は武昌府嘉魚縣にあり、東坡曾遊の地にあらずと、予は今其同異を查定せんとするものにあらず、赤壁嘉魚にありて

後、武昌の古戰場たる益賒焉たらずや。

武昌由來古蹟多し、夏口城は黃鶴山上にありて孫權の築く所、華容鎮も亦武昌にりて曹阿瞞の大敗身を以て逃れし處なるは上に已に述べしが如し。

此殺伐なる歴史を有する夏口城址の下、黃鶴磯の上にあるは黃鶴樓なり、蜀の費禕が黃鶴に乗じて來れる、江夏の辛氏が黃鶴を畫き之に乗じて去れる、其神怪的傳説は暫く措き、崔顥此樓に題して曰く、昔人已乘黃鶴去、此地空餘黃鶴樓、黃鶴一去不復返、白雲千載空悠悠、晴川歷々漢陽樹、芳草萋々鸚鵡洲、日暮鄉關何處是、煙波江上使人愁と、漢陽は江を隔つる七里なる漢陽にて、鸚鵡洲は武昌城南にあり、城西大江中に跨り尾は黃鶴樓に接す、李太白詩あり曰く、故人西辭黃鶴樓、煙波三月下揚州、孤帆遠影碧空盡、惟見長江天際流と、又曰く一爲遷客去長沙、西望長安不見家、黃鶴樓中吹玉笛、江城五月落梅花と、これより詩人の黃鶴樓を咏するもの絶えず、今繁を厭ふて暫く明の李夢陽の一絶を録して以て他を略せん曰く、黃鶴樓前日欲低、漢陽城樹亂鴉啼、孤舟夜泊東遊客、恨殺長江不向西。

武昌の勝地たること此の如し、曩に故張之洞の湖廣總督たるや、此地に於て湖南

兵を訓練して湘勇の勇天下に冠たりと稱せらる、今回反亂せし第八鎮の兵乃ち

これ也、別に我明治三十七年此地に第十一鎮を設けしも未だ完成せず。

張之洞は近來の名臣、武昌に天下最強の兵勇を作りしのみならず、更に此地を以て實業の中樞となさんと欲し、明治二十六年武昌に四工場を建つ、一を織布局といふ、紡績機百〇二臺、織布機五百臺を備へ、紡績機は一日棉糸製造高一萬六千封度、四萬〇六百五十六鍾を有し、織布機は經十四手、緯十六手の生金巾を製す、二を紡紗局といふ、紡績機百四十六臺を備へて十四手の糸を紡績す、三を官糸局といふ、上の二局に比して規模稍小なり、四を製麻局といふ、専ら麻糸を紡績す、我邦實業家の注意すべき問題也。

漢陽は江を隔て、武昌と相對す、禹貢荊州の域、春秋には郢之に國す、唐の時漢陽といひ、宋廢して縣となせしも、元明以來漢陽府に復す、前は蜀江を枕にし、北は漢水を帶び、高山大澤四環交映する要地たり、今次官軍が武昌革命軍を砲撃せしといふ、大別山は府城の東北にあり、此山の陰に鎖穴ありて、孫皓鐵鎖を以て江を截る所と傳ふ。

此地亦張之洞漢陽鐵政局を設けて、製鐵に従事せしめ、漢陽兵工廠を建て、武器を製造す、一時革命軍に占領せられ爲に其勢炎を張りしもの是也、張之洞が國を富まし兵を強めんとする志近世支那人に見ること少なき人物といふべし、漢口は西曆一千八百六十年、我萬延元年英佛聯合軍との和議により、前年の天津假條約を認めて開港せし貿易港にて、帝國領事館のある所、棉花、牛皮、大豆、棉實、麻類、生漆、豆粕、鶏卵、鐵鑛、鐵銑、猪毛、植物油、木蠟、藥種子、屑繭、屑絲、苧麻、石膏等を我國に輸入し、我國よりは銅塊、綿製品、海産物、石炭、燐寸と其材料、洋傘、綿糸、擬洋紙、枕木等を輸出す、實に彼我貿易の重要地にして、海産物のみにても一年に六千〇六萬二千五百三十圓を輸出すといふ、他に燐寸製造所あり、日本專管居留地内に設く、盛に硫黃燐寸を製造して本邦燐寸を驅逐するに至りしは注意すべき事なり、

第四章 張之洞の訓練せし新練軍

武昌の兵士亂を爲して天下震撼せしは時運にもよるべしと雖も、亦武昌練軍の

馳名天下に高かりしにもよらずんばあらず、今之が由て起る所以を見ん乎、

清朝起つてより滿州八旗練軍を以て禁衛兵となし別に漢人を以て綠營兵を組織し其數五十萬人、以て國家を守り、各省更に郷勇を組織して自衛の用に供す、此制行はるゝこと二百餘年、道光の末年長髮賊の亂起るや、將官久しく兵に習はず、綠營驕つて惰色あり、羽檄の征調を聞くに及で擧室驚號、死地に趨りて生還の理なしとなし、敵前に至るに比んで、秦越楚燕の士雜糅並び進み、將は將と相習はず、兵は兵と相知らず、勝てば則ち相嫉み敗るれば救はず、欽差強帥、復時に相齟齬して號令岐出し、士氣の衰ふる復名狀すべからず、潮勇、川勇等競ひ起りて微に應ずと雖も、多くはこれ遊民劇盜、慄悍無賴の徒民却て之に苦しむ、

是に於て江忠源初めて楚軍を創め、劉長佑之を佐け、其郷人子弟を挈へて慷慨難に赴き、始めて節制を講じ、騷擾を禁じ、義聲大に起る、これ實に湘軍の濫觴也、曾國藩儒臣を以て軍を長沙に治め、羅澤南、王鑫等諸生より起つて軍に従ふに及び、士人を選び、山農を領し、遊卒及び市井の無賴は擯斥して用ゐず、初め三百六十人を立て、一營となし、已にして五百人を以て一營となす、初め山農柔懦なるも

の死を怖れて遠征を畏れしも、士人死を輕する風に激勵せられ陣を陥れ城に克ち、戦功天下に徧きに及で、戎に従ふもの日益多く、千人を募れば萬人之に應じ、萬人を募れば數萬人之に應じ、國藩忠誠の徹する所、湘軍遂に天下第一の名を博したり。

長髮賊平定の頃は曾國藩湘淮軍百六十營を統せりと稱す、李鴻章其後を承けて益武備に志し、水陸の盛一時東洋第一と稱せられしも、明治二十七八年役、脆くも敗北して陸は遁逃し、水は全滅し、折角我明治十七年佛國と戰ふて武名を損せざりし功名を損し、支那兵の惰弱取るに足らざるを證明したり。

是時に當りて最も早く自覺せしは湖廣總督張之洞にして、南京に武備學堂を設けて洋式訓練に怠らず、心を曾國藩當時湘軍強勇の古に還らんことを期し、特に我日本の兵制と兵士の勇猛に私淑する所あり、我邦より武官を招聘して教官となし、又湖南の壯丁を募りて我邦に留學せしめ、日本軍隊の精神形式を稟けたる清國新軍中錚々たるものゝみを集めて新練軍を組織し、之を武昌に駐屯せしむ、其清國唯一の驍兵と稱せらるもの亦故なきにあらざる也。

光緒二十六年(我明治三十三年)北清事變あり、尋で光緒三十年(我明治三十七年)二月十日我邦露西亞と釁あり、連戦連勝して五月五日には陸軍の一部已に遼東半島に上陸す、是に於て清國の上下愕然として長夜の夢より覺め、今更の如く張之洞の先見に服し、清曆四月十六日新陸軍組織の上諭を下し、組織編制を悉く日本の範に模し、五個年を以て三十六鎮(三十六個師團)を設置するの計を立て、先づ二十三鎮を置く。

- 第一鎮 直隸省保定 (完 成)
- 第二鎮 同省永平 (完 成)
- 第三鎮 奉天省城 (完 成)
- 第四鎮 直隸省馬廠 (完 成)
- 第五鎮 山東省濟南府 (完 成)
- 第六鎮 直隸省保定 (完 成)
- 第七鎮 江蘇省清江浦 (未完、但若干部隊成立)
- 第八鎮 湖北省武昌 (完 成)

第九鎮	江蘇省南京	(完 成)
第十鎮	福建省福建	(完 成)
第十一鎮	湖北省武昌	(未完、但若干部隊成立)
第十二鎮	江蘇省蘇州	(未完、但若干部隊成立)
第十三鎮	湖南省長沙	(未完、但若干部隊成立)
第十四鎮	江西省南昌	(未完、但若干部隊成立)
第十五鎮	河南省開封	(未完、但若干部隊成立)
第十六鎮	安徽省安慶	(未完、但若干部隊成立)
第十七鎮	四川省成都	(未完、但若干部隊成立)
第十八鎮	新疆省迪化	(未完、但若干部隊成立)
第十九鎮	雲南省城	(完 成)
第二十鎮	奉天省城	(完 成)
第二十一鎮	浙江省杭州	(完 成)
第二十二鎮	山西省太原	(未完、但若干部隊成立)

第二十三鎮

吉林省吉林

(完 成)

別に禁衛軍一鎮ありて二十四鎮となる

武昌は軍事上重要な地なるを以て二鎮即ち二個師團を置き、其一は未完品に屬すと雖も、他の一は已に完成して其新營兵は實に張之洞訓練の兵勇なり、其反亂を聞て舉朝震駭せしも宜ならずや。

第五章 革命の歴史

昔者孟軻氏、齊王の間に對へて曰く、一夫紂を誅するを聞く未だ君を弑するを聞かずと、これ武王に就ての苦しき辯護なりと雖も、自我と事大に強き支那人の思想は常に此種身勝手なる口實の下に革命を繰り返すに過ぎず。

第一 黃帝

天皇、地皇の昔は邈たり、革命黨が先祖なりと稱する黃帝も亦革命黨の一人なり、河南の軒轅丘(開封府新鄭縣)に生れ、神農氏の第八世に當りて革命軍を起して諸侯を征伏し、推されて天子となり世を少昊、顓頊、帝嚳、帝堯の子孫に傳ふ。

第二 帝 舜

帝舜も亦革命兒なり、古來此人ほど仕合せのよき人はあらざるべし、二十四孝の第一に推され、聖人として孔孟の徒に崇拜せられ、儒家をして堯に信せられて其二女を配せられしと傳説さるゝ幸福なる人なるが、果して然るや否や、首肯し難き點少なからず、史家或は謂ふ、舜巧みに堯を籠絡して其天下を奪ひ、堯を幽して其子丹朱を押し込め、娥皇女英の二美人を囚へて妻妾となし、堯の舊臣鯀、驩兜、共工、三苗等を刑し、八元八愷などいふ新人物十六人を採用し、三苗の一族が鯀の不孝の兒禹の如き服従主義を取らずして、義を唱へて彼の命に應せざりしより、妻妾を拉して遠征し、彼は南蒼梧の野に崩じ、二女亦蠻煙瘴雨に毒せられて湘水の邊に殞せしは事實にあらざるなきか、舜の事を見るに其弟子たる儒書によるべからず、之を韓非子竹書等によりて眼光紙背に徹すべしと、蓋しこれ近來史家の一致する所なり、而して三苗の徒が蟠居して王化に従はざりしといふ地は今の湖北湖南兩省にして、武昌、岳州、九江方面なるは亦妙ならずや。

第三 夏

舜崩じて後禹が諸侯に擧げられて帝位に就き、國を夏と號せしも亦一の革命也、夏は約四百四十年を保ちて桀王に至る。

第四 殷

殷湯王も亦革命の主なり、夏の衰ふるに乗じて兵を起して諸侯を征し、終に桀を鳴條(山西省解州安邑縣)に破りて夏を亡ぼし、國を殷と號す、二十八王六百四十餘年を経て紂王の世に迨で周の爲に亡ぼさる、時正に西曆紀元前千八百十八年なり。

第五 周

孟軻によりて辯護せられたる周武王は殷を亡ぼせし革命黨の首領なり、初めて封建制度を設けしも後世厲王に至りて無道、民服せず、是に於て周公召公(成王の時の周召二公にあらず)假に政を攝して共和國と稱すること十四年、後復周の世となりしも封建制度の餘弊として、王室式微して尾大揮はず終に春秋戰國となる。

第六 春 秋

周平王東遷四十九年、魯隱公元年を春秋の初となす、正にこれ西曆紀元前七百五

十六年、周の親族と親族にあらざるものとありと雖も、共に猶未だ王室を尊むことを忘れざりき。

第七 戰國

然るに優勝劣敗の原則は大小の兼併となり、周威烈王の時に迫りて支那は齊、晋、楚、韓、趙、魏、秦の七國となり、天子は徒に虚器を擁し、領土は七國の分割となり、互に争ふて兼併を圖りしも、秦王政出るに及び六王畢りて四海一に歸し、天下は竟に秦の有となる。

第八 秦始皇帝

秦始皇帝が他の六國を亡ぼして天下を統一せしときは、其即位二十六年にして實に西曆紀元前二百二十一年なり、彼れ久しく亂れたりし天下を統一せしより氣驕り志滿ち、徳は三皇を該ね功は五帝に等しと自稱し、自ら皇帝と號し、關中の固めは金城千里、子孫帝王萬世の業也と信せしも、身死して國忽ち亡ぶ。

第九 高祖

支那革命史の中に於て最も奇抜なる最も有名なる、或る意味に於て革命の嚆矢

とも見るべき色彩を帶ぶるものは、秦末の亂なるべし、西曆紀元前二百十年正月、始皇東方巡幸中に殞し、幼子胡亥二世皇帝となるや、翌紀元前二百九年七月、漁陽順天府密雲縣の西南の成長陳勝、吳廣先づ兵を擧ぐるや、天下雲集響應して山東の豪傑並び起ち、項羽咸陽を屠りて火消へざること三日、秦竟に亡ぶ、始皇自ら帝と稱するより子嬰に至るまで三世僅に十五年、然るに項羽亦劉邦の爲に亡ぼされて漢祚茲に建つ。

第十 漢末の革命亂

西曆紀元二百〇二年、漢高祖天下を一統せしより戦争に困しみし漢民族は柔順に國命を奉せしが、前漢の末國運の衰ふる所初めて秘密結社起るに至れり、西曆紀元六年、權臣王莽、哀帝を弑し、孺子嬰を殺し、自立して新政府を建つるや、恰も國政の紊亂と連年の凶歉、人心を刺激し、赤眉、銅馬、鐵脛、綠林、大槍等の賊所在に崛起す、之を現今秘密結社の嚆矢とす、赤眉賊は朱を以て眉を染め、以て識とせしにより名けしものにて、鄒瑯の樊宗、これが長たり、綠林は今の湖北省安陸府當陽縣に發生せし賊にして、王匡、王鳳の徒之を率ゆ、今猶群盜を指して綠林の徒といふに

よりて見れば、如何に一時其勢の猖獗なりしかを想像するに餘りあるべし。彼の後漢の世祖光武皇帝も實は漢末群盜の一人にて、平林(湖北省隨州)の盜と新市の盜に従ひ太常といふ職に従事せしが、王莽亡びて後劉秀他の群盜を征伏して皇帝の位に登る、これを後漢の光武帝となす。

第十一 後漢末の革命亂

前漢末の争は王莽を亡さんが爲に群盜競ひ起り、終に赤眉と武帝の争となりしも建武三年赤眉崑山に敗れしより天下復漢の有となる。然るに其後後漢の命數亦衰へて、靈帝、李膺等黨人百餘人を誅殺して處士横議の途を塞ぎしを導火とし、熹平元年(西曆百七十二年)會稽の許昌先づ亂を起し、二年を出でずして亡びしと雖も、一たび點せられし火は容易に滅せず、五斗米師なる賊先づ起る蓋し巴郡の張脩なるもの黄老の學に假托して、妖言靈異を説て愚民を惑はし、術を以て病を療し、大に兵を集めしなり、已にして鉅鹿の張角、妖術太平道を唱へ、符水咒法を施し、弟子を四方に派遣して愚民を誘惑すること十餘年、徒衆十萬を得て、大小三十六方を置き、方毎に渠帥を立て、甲子革命の説を揚言して、中平元年甲子の春(西曆

百八十四年)一時に兵を起し、角は自ら天公と號し、二弟張寶、張梁を地公、人公と稱せしめ、衆皆黄巾を以て識表とせしを以て黄巾の賊ともいひ、亦蛾賊ともいふ、これより雷公、張白騎、于氏根等競ひ起りて天下大に亂れ、幾もなくして漢室亡び、世は恰も今の袁世凱の如き老猾なる魏の曹操と、黄巾の賊を亡すべく蹶起せし蜀の劉備と、勢に乗じて江東を割取せんせし吳の孫權と、巴狀を爲して相食むの世となり所謂三國對峙の世となれり、而も實をいへば曹操は袁世凱と同じき火事場泥棒にて、孫權も劉備も共に地方の賊たること、黄巾賊とあまりに相違なく、黄興、黎元洪にも比し得べし、特に劉備が關羽、張飛と三人、桃園に於て兄弟の義を結び、同年同月同日に生れざるも、願はくば同年同月同日に死せんと誓ひし事が、今に支那秘密結社の教規模範となりしは、三人の眞面目を顯はして妙ならずや。

第十一 六朝暗黒時代

三國は竟に共食に終れり、司馬氏魏の後を襲ふて晉を創めしと雖も、決して天下を一統せしにあらず、若し統一し得たりとせば武帝の末年十年のみ、幾もなくして八王の争起り、骨肉相食むに及で、匈奴、羯、羌、氏、鮮卑の五胡之に乗じて天下麻の

如く亂れ、これより東西兩晋合せて百五十年、支那は五胡と國內に分立せる十六國の争となり、天下は晋の天下にあらず、全國に王と稱するもの八十三主、短きは興亡十一年の南燕の如きあり、世は秘密結社の必要なし、晋劉裕の爲に亡ぼされ、後にも支那は南北朝の二に分れ、北朝は東魏、西魏となり、南朝亦宋、齊、梁、陳、隋の五代朝起暮仆し、西曆六百十八年唐に統一せられて、天下僅に一定す。

第十三 唐末の秘密結社

西曆紀元二百年頃、黃巾賊等の秘密結社起りし後、六百十八年頃に至るまで秘密結社の必要なく、唐代は振古未曾有の文明時代なりし爲め、秘密結社も起らざりしが、唐室式微して、兵革息まず、賦稅急にして、關東連年水旱の災あり、百姓流殍するも州縣救はざるに及んで、所在盜起り、僖宗皇帝乾符元年(西曆八百七十六年)濮州の王仙芝先づ兵を長垣に起し、曹州の黃巢之に應じ、仙芝は亡びたれども、黃巢は却て大となり、沂濮を陥れ、宋林を掠め、宣州に寇して、浙東に入り、更に廣州、潭州を陥れ、廣明元年(八百八十年)には秋江を渡りて、冬洛陽を取り、潼關を破りて、國都長安に入り、僖宗皇帝を蒙塵せしめて、自ら大齊帝と稱す、幾もなく李克用の爲に

に亡ぼされしも、之より唐功臣の内訌となりて、唐終に亡び、後梁、後唐、後晋、後漢、後周と姓を易へしと雖も、五代の世とは名のみ、其實英雄瓜分すること六朝の如く、天下再び亂麻して、後西曆九百七十六年宋太祖趙匡胤の手によりて、僅に一定す。

第十四 宋の梁山泊

後世宋徳衰へて、徽宗皇帝の時、宋公明、盧俊義の徒一百八人、梁山泊の忠義堂に會して、天を父とし、地を母とし、星を兄弟とし、日月を姉妹とし、蠶を啜つて誓約をなし、宋室を恢復せんことを企てしも、敵は金といふ滿州人にて、内訌の如き都合に行かざるより、壯士空しく、水滸傳中の俳優となり、盜賊の群に誤られしと、其誓約今猶秘密結社の模範たるに止まり、徽宗は金に囚はれ、宋室南遷して、小康を保ち、南宋祥興二年(西曆千二百七十九年)陸秀夫帝昺を抱いて、廣東の海に投せし時も、相手は元といふ滿州人なりし爲、革命黨は起たざりき。

以上宋末に至るまでの革命の迹を見るに、秦二世の時起りし陳勝、吳廣、前漢末の赤眉賊、後漢末の黃巾賊、唐末の黃巢賊、皆其行實に於て一致する所あり、而して此等の擧兵が、漢高祖、後漢光武、蜀劉備、唐李克用等をして功を爲さしめしも、一致し

て、李克用の他は高祖も光武も劉備も若し敗るれば皆賊といはるべきもの、一人なるも奇なり更に劉備が桃園に義を結びし三國誌、宋公明等の水滸傳は革命家の愛讀書たるに至ては、曾我物語と義士傳を愛讀する我等日本人の夢想し得ざる所なり而して革命の方法元末の白蓮會、明末の白蓮會、何れも同じ事を繰り返せるに見れば今回の動亂たこへ一時鎮定するも、赤眉たり、黃巾たり、黃巢たり、白蓮たるの功を保ち、清國の騷亂猶繼續して終に天命を享くると稱するもの、手に歸すべき乎、元明二朝の革命は請ふ次章に之を叙せん。

第六章 現今の秘密結社

支那の秘密結社は漢楚軍談江東八千の子弟によりて芽を生じ、演義三國誌桃園の盟に根を培ひ、水滸傳一百八人によりて幹を助長せるかの觀あり、而して此秘密結社の發達し且盛なることは、恐らくは現朝ほどのものはあらざるべし、清國政府の歴史は秘密結社に惱まざるゝ歴史と唱ふも不可ならん乎、今其秘密結社を綜合すれば白蓮會、三合會、哥老會、革命黨の四に歸すべし。

第一 白蓮會

白蓮會は極めて古き歴史を有し、國家の末運に當りて二度までも革命を繰り返せり。

南宋の亡ぶる時革命亂を見ずして國家は元に移りたりと雖も、元衰ふるに及んで順宗皇帝の至正十年(西曆紀元千三百五十年)樂城の韓山童なるもの其祖父の組織せる白蓮會を煽動して香を焚きて衆を惑はし、彌勒佛の下生を倡言し、河南及び江淮の愚民之を信するもの多きを奇貨として、至正十一年劉福通、杜遵道、羅文素、盛文郁、王顯忠、韓咬兒等と結託し、山童自ら宋の徽宗皇帝八世の孫と詭り、白馬、烏牛を刑して天地に誓ひ將に兵を起さんとして發覺し、山童捕へられたりと雖も、其子韓林兒、劉福通と共に朱阜に據りて兵を擧げ、汝南府及び光息州を陥れて兵十萬と稱す、其兵皆紅巾を用ひて識とせるより、世人之を紅軍とも香軍ともいふ、終に亳州に都して國を宋といひ韓林兒を小明王といひしが、郭子興、徐壽輝、陳友諒、張士誠など並び起つて各王と稱するに至つて、中原終に朱元璋の一掃する所となり、一同國を明に捧げて白蓮會の宋朝回復は壽餅となり、先例の如く徒

に他の走狗となる。

元末白蓮會の活劇は更に明末に於ても繰り返され、以て支那革命史の義務を全ふしたり、明熹宗皇帝天啓五年(西曆千六百二十五年)薊州の人妖狐の異香を得たりと稱して白蓮教と唱へ、自ら聞香教王と號し直隸、山東、山西、河南、陝西、四川の各省に勢力を扶殖し、後捕へられて獄に死せしも、其子好賢、鉅野の徐鴻儒、武邑の于宏志等と兵を擧んと約し、謀洩れたるを以て徐鴻儒期に先つて兵を發し、自ら中華福烈帝と號せしも、幾もなく敗北し、却て明末流賊蜂起の俑を作り、李自成、張獻忠等が群起するに至りて、明朝終に四分五裂し、二百年の朱明を以て終に愛親覺羅氏に捧ぐるに至れり。

白蓮會之を小分すれば種々あり、天里教、白羽會、三香會、八卦教、大刀會、義和教、小刀會、在理教、みな是白蓮會の一派にて、明末嚴禁以來、彼等は白蓮會の名を口にせずして種々の分派中に隱る。

第一二 三合會

三合會又天地會といふ、元は世人此會に名けしものなるも、遂に會員自ら用ゆる

所となる、或は三點會ともいひ、清水會、七首會、双刀會等の支會を有す、此會は滅清興明を主として、清聖祖康熙十三年(西曆千六百七十四年)に起りしものにて、會の事業として最も有名なるは、洪秀全と結托して長髮の亂を爲せしにあり、海外に亦四百萬人の會員ありといふ。

第二 哥老會

哥老會又の名は哥弟會、其發生は長髮亂平定後にあり、同治年間長髮賊を平定せる湘勇の子弟、撤營の後衣食の資に窮して、各團體を組織したるに初まる、故に彼等の中には當時海陸軍の將校士卒もあり、又賭博強盜を業とするものもあり、彼の李鴻章の弟李鴻藻が廣東より京に歸らんこせし時、財貨を百餘隻の船舶に載せて湘水を下りし時、之を襲ふて其船八十隻を掠奪せしものは哥老會なり、彼等は白蓮會の支流たる滿洲馬賊と同じく強盜主義にして、梁山泊崇拜なるを以て、竊盜を嚴禁す之を紅幫といふ、別に青幫なるものあり、所謂鹽梟及び光蛋にて、安慶道友會なるもの是なり、此徒元と運河の漕糧に従事せしが、海運の發達に連れ、て業を失し、衣食に窮するに至りしを以て、大賊潘氏の下に集つて鹽の密輸入、及

び商人の依頼に應じて釐金の脱税を行ふを業とす所謂潘家なるものなり更に黒幫とて窃盜強盜をなすもの一名江湖團と白幫とて詐欺拐帶を爲すものごあり之等は哥老會と自稱するも哥老會にては賤しんで齒せずといふ。

第四 革命

清國に文明的革命黨の起りしは極めて新しい事にて光緒十八年(西曆千八百九十二年)我明治二十五年に孤逸仙陸皓東楊飛鴻等數人相謀りて興中會を起せしに始まる當時は廣東省のみなりしも僅々十七年間に會員全瀛國に蔓して終に今次の革命軍となれり。

第七章 清朝廷と革命亂

第一 湖北の白蓮教匪

元末の韓山童明末の徐鴻儒によりて二度までも歴史を繰り返したる白蓮教は乾隆帝の末年より再び天下を騒がし始めたり乾隆帝の時は清國の最盛時にて雲南金川の亂も臺灣鄭氏の獨立も皆此帝の時に平定せしものなるが一面には

乾隆十八年(西曆千七百五十三年)水滸傳の絶版を命じ其二十五年には關帝を尊んで神勇と諡せしに見るも如何に全國に危險思想が横溢し帝がこれに對して剛柔宜しきを得るに苦心せられたるかを知るに足る然るに乾隆の末安徽省の劉松なるもの白蓮會の首領となり祈禱及び念咒を以て病を治すと稱して密使を派して教を西部諸省に傳へ事覺はれて乾隆四十年(西曆千七百七十五年)甘肅省に流さる然るに其徒劉之協末之清など遺教を四川陝西湖北に布きて流俗を煽動し黨與を集めて兵を擧げ王發生なるものを奉じて明氏の裔と詭り將に大に爲すあらんとせしに乾隆五十八年(西曆千七百九十三年)事覺はれて捕へられ王發生は齡猶幼なるを以て死を免して新疆に流されしも獨り劉之協は遠く遁れたるを以て州縣に令して大に之を索ね州縣の官吏は逮捕を事として暴逆を逞ふし荊州宜昌の地羅織すること數千人民怨み人憤るに際し恰も之より先乾隆四十六年貴州銅仁府の石柳鄧漢族が苗地を侵占するを憤りて反し吳八月なるもの諸苗軍を指揮し平壩に據りて自ら吳王と稱せしより劉之協機乘すべしとなし仁宗の嘉慶元年(西曆千七百九十六年)叛を圖り劉之協聶傑人張世謀は荆

州に姚之審及び齊林の妻王氏は襄陽に孫士鳳徐天德王三槐冷天祿は四川に張士龍張漢潮張天倫は陝西に一時並び起つて西部諸省を風靡せしが嘉慶二年官軍吳八月等を平げしにより全力を注いで教匪勦討に力め、教匪の中襄陽の王氏最も強く、南陽北陽地方を掠め南に轉じて漢江を渡り、六月四川の賊に合し又東して湖北に還り勢甚だ猖獗にして、征討の諸將多く功を收むること能はざりしも、獨り將軍登保のみ連りに教匪を破り、嘉慶三年(西曆千七百九十八年)七月王三槐を虜にし同五年(千八百零年)教首劉之協を擒にし、翌年五月徐天福は溺死し、嘉慶七年略鎮定したれど尙遺孽ありしにより更に征討し、嘉慶九年(西曆千八百零四年)九月漸く師を班せり、教匪起つてより前後九年、擾亂五省に及び賊を殺すこと數十萬人、軍費二億兩に上り實に一大悲惨事たり、而して教匪亡びたりと雖も清國之より所在の賊徒に忙殺さるゝの端を開けり。

第一 臺灣の三合教匪

乾隆帝の末年は南陲に於て叛亂頻りに起り、就中苗族の亂と白蓮教匪は江南の各省を亂せしが乾隆五十二年(西曆千七百八十七年)臺灣の三合會員地方官憲の

横暴を憤りて初めて兵を擧ぐ、初め臺灣の土民數十年間三合會に黨して地方官憲の暴政を避け、彰化縣の大理材に住める林爽文なる三合會の頭目、之を保護せしが、乾隆五十二年臺灣の總兵柴大記、三百の討伐軍を起して林を攻む、是に於て林は土人と共に起ち一夜陣營を襲ふて之を破り、司令官を斬殺して彰化を陥れ、後各地に轉戦して久しく清軍を苦しめしが、乾隆五十三年福建の援軍黃提督及び普總兵に挾撃せられて大敗し、大理材に退かれんとする途中にて伏兵に陥り、遠く蕃地に遁る、然るに鄭氏なる妖婦あり自ら殘軍を指揮して屢々清軍と戦ひしも、軍敗れて後廣東に遁れ、捕はれて斬に處せらる。

第三 清水會員の處刑

三合會は臺灣にて敗れしも滅清復明の志益堅く、會員國內に瀰蔓するより、嘉慶十四年(西曆千八百〇九年)政府は三合會の支流なる清水會員胡炳耀及び他の十七人を江西の崇義にて捕へ、叛亂煽動の罪を以て處刑したり。

第四 李文成の天里教匪

天里教が白蓮會の分身なることは前に已に之を述べたり、劉之協敗れし後彼等

は白蓮會の名を避け天里教、白羽會、三香會、八卦教などに分身し以て時機を窺ひしが、嘉慶十八年(西曆千八百十三年)九月十六日、天里教首李文成によりて一大隱謀は企てられたり。

李文成は河南に於て多くの徒弟を有し、同志林清なるもの亦直隸、山東に於て多くの徒弟を有す、二人天文を觀て人事を豫言すと稱し上下之を尊信するもの多きに乗じ、林清は其徒弟の内輪に贈賄して、之をして其徒を宮中に誘致せしめ、山東、河南並に蜂起するの約を定め、九月十六日林清其徒二百人をして田夫に扮し宣武門より潜に内城に入り武器を藏して酒肆の中に混せしめ、日暮東華西華の兩門を犯し、各頭上に白巾を着けて識となし、大監劉金等は其東を引き、高廣福等は其西を引き、閻進喜等は内應するの約を以て庭内に入りしも、事齟齬して宮中に入る能はず、會々諸王大臣兵を率いて宮中に入りしを以て事破れたり、林清は北京より數里隔りたる黃村に隠れしも官の擒にする所となり、河南にても亦知縣強克捷なるもの李成文の隱謀を諜知し之を捕へて獄に下し且其脛を斷つ、是に於て所在の暴徒首領の慘刑を聞て一時に蜂起し、三千の教徒知縣を殺

して李文成を幽囚の中より救ふて滑州に據り、他の徒弟は山東、河南の各地に於て官吏を殺して數城を奪ひ、李文成は脛の創甚しく自ら陣頭に立て指揮すること能はざるを以て、其黨與に命じて運河の要地たる道口鎮を占領せしめ、糧餉の途を阨して北京の死命を制し、以て四方の教徒を號令せしが、嘉慶十八年(西曆千八百十三年)官軍の亡ぼす所となり、李文成は桃源の教首劉國明なるものに助けられて、一旦北門より遁れたれども、官軍の追撃甚しきにより自ら免れざるを知て火を縱つて焚死し、翌年陝西省の白蓮教徒も亦官軍に撃破せられて四方に散亂せり。

第五 嘉慶の三合會員處刑

白蓮會は李文成の一敗にて一時其迹を潜めたるも、一方三合會は益教線を擴張するにより、嘉慶二十二年(西曆千八百十七年)千餘名の三合會員を處刑せしが、却て三合會員を激するの素をなし、これより後三合會員は武器を取て官府に抗し、就中廣東省の如きは最も甚しく會員に苦しめられたり。

第六 瑤族の亂と三合會

道光十二年(西曆千八百三十二年)兩廣湖南の山中に住する獠族亂を爲す、政府はこれ獠族と交通せる三合會員の煽動なりと邪推し、獠族を討たずして三合會を攻め二千人を鑿殺す、是に於て三合會員蹶然起ちて獠族を助け、詭計を用ゐて官軍を惱ませしも、其後獠族は官軍に略されて山中に退き、三合會員獨り敵前に遣されて多數の會員屠戮せらる。

第七 鴉片亂と三合會の進歩

清廷が秘密結社に惱まされつゝある間に世界は刻々進歩して東西益接近す、是より先十五世紀の末、葡萄牙人が東洋貿易の全權を掌握するに當つて、亞刺比亞人の滿刺加に鴉片を輸入せしを初とし、明末には瓜哇より臺灣に入り、煙草の禁令ありて後鴉片之に代りて清初には支那一般の嗜好甚しく、世宗、高宗の世に屢禁じたるも其甲斐なく、英人印度を奪ひて東印度商會の權を左右するに及び、鴉片の輸入益盛にして禁令も燒却も其效なく、道光十七年(西曆千八百三十七年)には其額三萬四千兩、商益千六百萬弗に上りしより、林則徐なるもの上書して其弊害を痛論し、道光十九年(千八百三十九年)林則徐は湖廣總督に擧げられて廣東に

到り、英商を強いて其所有の鴉片二萬餘兩を燒きて英人を放逐したり、英人已むを得ず香港を占領し清兵と戰ふて撃て之を走らし、翌道光二十年(千八百四十年)四月英國議會は戰を決議し、七月水師提督ゴルドン、ブレームル氏、舟山列島の定海を取りて根據とし、乍浦を攻め廈門、寧波を封鎖し、八月白河口に至り國書を呈し政府亦和を講せしも和議成らず、道光二十一年(千八百四十一年)ブレームルは虎門堡を抜き廣東を攻めしも、府民六百萬兩を賂ひしを以て軍を退け、新に印度より來りしビュ、ゴフ氏と共に北上し、廈門、定海、鎮海、寧波等を陥れ、道光二十二年(千八百四十二年)楊子江口に迫り、吳淞を陥れ、七月鎮江を抜き八月南京に迫る是に於て舉朝震駭して欽差大臣耆英を南京に遣はし、八月二十九日英國大使ヘンリー・ポッチンジャーと有名なる南京條約を結び、廣東、廈門、福州、寧波、上海の五港を開き、香港を割て英國に與へ、償金二千萬弗を出して事寢むを得たり。

然るに此廣東、廣西の兩省、江西、福建、臺灣は三合會員の本場にて取り分け廣東、福建の兩省は三合會員の製造、孵化本場なるが、彼等が世界の大勢を見る眼は支那政府よりも明るく、馬來及び南洋諸島、暹羅、印度の支那殖民にまで主義を及ぼし

連絡を通じ、時々強盜剽窃を爲して各國政府に厄介物視せられしが、道光二十一年鴉片亂起るや、新嘉坡にある三合會員は滿州政府を顛覆し、明朝を恢復するの時機到れりとなし、英國海峽殖民地政府に提議して用ゐられざりしも、彼等の思想は此時よりして一段の進歩を爲し、海外同胞との連絡を取り、今や海外に四百萬人の同志を有するに至れり。

第八 長髮賊の亂

三合會は海外殖民と連絡して長足の進歩を爲し、進歩の結果基督教分子をも含むに至れり、蓋し三合會の別名三點會は廣東の朱九濤より初りしものにて、朱九濤は基督教を奉じ三位一体を三點となし、滅滿興漢に於て三合會と一致するを以て深く三合會に結托したり、長髮賊の首領洪秀全は朱九濤の門人にて、洪は廣東城を距る約七十里、花縣の農夫の家に嘉慶十七年を以て生る、幼にして父母を喪ひ書を郷里の徒弟に授くるを以て業とせしが、後屢々省試に應じて及第せず十年一衫四方に流寓し陰に同志を求め、常に賣卜して江湖に衣食す、朱九濤が自ら明室の後裔と稱し基督教を奉じて三點會を創め、三合會と混合して愚民を惑

はすに及び、秀全は同郷人馮雲山と共に弟子となりて基督教を奉じ、九濤死するに及で秀全推されて教主となり、道光十六年以來盛に教を布けり。其教は眞言寶話といふ書を作りて教理を説き、天父を耶火華と名け、耶蘇を長子として天兄と呼び、秀全自身は其弟と稱し、其教を奉ずるものを師徒といひ、男を兄弟、女を姉妹と呼び、皆髮を蓄へ服を易へしめ、馮雲山、楊秀清等の門人をして四方に傳播せしめたり。

恰も道光三十年(西曆千八百五十年)宣宗崩して文宗位に即きしを以て、洪秀全此機に乗じて兵を廣西省金田に起せり、會々疫病大に起り所在人心傾動して、三合會員到る處崛起し、洪秀全の爲に多大の便利を與へ、就中廣東の三合會員羅大綱が會員を伴ふて之に赴きしは非常の好都合なりし。

此の如く洪秀全一たび兵を擧るや三合會の羅大綱先づ應じ、貴縣の林鳳祥、湖南の洪大全等亦之に應じて勢ひ猖獗となりしにより、文宗皇帝は林則徐を欽差大臣となし、廣西に赴かしめしめし、則徐は途潮州に至りて病死せしにより、兩江總督李星沅をして之に代らしめたり、然るに賊勢猖獗にして屢々征師を破り、咸豐元

年(西曆千八百五十一年)秀全象州に入りて太平王と稱す、文宗更に大學士賽尙阿を欽差大臣となし、巴清德等の諸將を率ひて征討せしめしが、偶ま李星沅、巴清德等相續で病死し、八月秀全は永安州を陥れ、國を太平天國となし、親ら天王と稱し、其徒の揚秀清を東王、蕭朝貴を西王、馮雲山を南王、韋昌輝を北王、石達開を翼王、洪大全を天德王となし、亟相軍師以下博士八百人に位階を授く、西人が指して太平賊といふもの蓋し此國號に基するなり。

此時官將烏蘭は梧州を扼して賊の廣東に進むを防ぎ、咸豐二年(西曆千八百五十二年)洪大全を擒にせしも、秀全屈せずして中原を伐つに決し、揚秀清は全州を陥れ、長髮賊の謀主馮雲山湘江に戰歿せしも、敢て沮まず、六月秀全は道州、桂陽を抜き、湖南、廣東の要衝たる彬州を奪ひ、蕭朝貴が長沙に戰歿せしを憤りて之を圍みしも、下す能はず、去て洞庭を渡り、岳州を取り、民衆五千を發して東に下り、漢陽、武昌を陥れ、是に今回の革命軍と同じく堅固なる根據地を得たり。

是に於て北京政府の狼狽甚しく、提督向榮は先に賊を追ふて長沙、武昌に戰ひしも、賽尙阿は功なきを以て政府は兩廣總督徐廣縉を以て之に代へ、廣縉も亦逡巡

して進まざるにより、遂に向榮、琦喜を欽差大臣となし、直隸、陝西、黑龍江三省の兵十餘萬を督し、河南に赴いて賊を拒がしめたり、然るに彼等は官軍徒らに虚勢を示すのみにて能く爲すなきを見るや、秀全船舶一萬を以て江を掩ふて下り、沿岸の諸市を下し、終に蕪湖を陥れて、咸豐三年(千八百五十三年)三月、金陵乃ち南京を取り、將軍、祥原等が兵民を督して抗守せしを怒つて悉く之を屠り、其數四萬餘人の多きに及び、資財を散じて將士を犒ひ、林鳳祥をして鎮江、揚州兩府を下して南、北兩路の官軍を阻隔せしめ、器械を整へ、金穀を蓄へ、長江の險を守りて南清に臨んで、明室の正嗣と號し、律令制度悉く西洋の典章を模し、自由を重んじ、蓄妾買娼を禁じ、弓足奴婢の惡習を停め、養老育兒院を置き、貧窮を恤み、力を新政に盡して、中清以南に新帝國を樹立せんとするに至れり。

若し此儘にて推移したらんには支那に二大帝國が並立せしなるべく、征討軍たる欽差大臣向榮は金陵城東に江南大營を、琦善は揚州に揚州大營を設けて對陣するも、軍氣沮喪して能く爲すなきに乘じ、賊の亟相林鳳祥兵を率ひて北上せしは後年長髮賊を敗るの基を開きたり。

咸豐三年(千八百五十三年)林鳳祥兵を擁して北清征討の途に上り、五月鳳陽を陥れ開封府を攻めしも抜く能はず、七月黄河を渡り西の方山西の平陽府を陥れ、終に直隸省の臨洛關に入り、十月深州を陥れ、天津を襲ふて運河の靜海縣に據り、前後僅かに半年にして四省の地を蹂躪し二十六城を下し、北京爲に震駭したり。然るに林鳳祥が兵を擁して北上し賊衆亦南京にあるや、官軍此處に乗じて長江沿岸の地を恢復したり、是に於て賊將楊秀清之が克復を圖りて南昌を圍み、湖北按察使江忠源急を聞きて之を救ひ、清國擾亂反正の名將湖南湘郡の曾國藩も亦浙勇二千楚勇一千を以て之に赴き、楊秀清を走らして南昌九旬の圍みを解く、此時忠源三省會勦の議を建て上疏して湖南湖北四川の三省に戰艦を作らしめ、廣東に令して巨砲を鑄さしめ、曾國藩亦其議を用ひ、衡州に造船所を設け石礮を備へ水師兩軍を統督して江を下りたり。

然るに南昌復た賊の陥いる所となりて連りに九江、黃州、漢陽を攻略し湖北諸郡大半賊の鹵掠する所となり咸豐四年(千八百五十四年)一月には賊將春日綱、安徽の新都廬州を抜き、湖北按察使江忠源戰歿して賊勢復た長江沿岸に振ふ。

一方北京方面にては惠親王奉命大將軍となり、僧格林沁、勝保と共に林鳳祥を伐ち、楊秀清兵を分ちて林を助けしも遂に克たずして豐咸五年(千八百五十五年)三月林鳳祥は僧格林沁の爲に阜城に擒せられて、賊の北征軍遂に亡ぶ。

南方にては前年冬官文、胡林翼等湖南湖北の賊を平げ、咸豐六年(千八百五十六年)冬武昌、漢陽を克復し、咸豐八年(千八百五十八年)九江を下し水路東征の策を議す之より先江南提督和春、廬州を復し、合肥の李鴻章亦軍に従ふて起り、曾國藩の弟曾國荃も亦湖南より兵を起して討賊の軍に従ひ、揚州大營の琦善病死せしを以て之に代りし托明阿、金陵大營の向榮も亦病死して之に代りし和春等と一致して大軍四方より迫りて金陵乃ち南京を壓したり。

此時に當つて長髮賊の形勢次第に衰へ、林鳳祥の戰死後諸將相和せず、加ふるに天王洪秀全猜忌の心深く、東王楊秀清が己を圖りて自立せんとするを見て、北王韋昌輝をして之を殺さしめ、諸將の服せざるを見て、又昌輝を殺せしを以て翼王石達開禍の身に及ばんを恐れ去て復南京に返らず、西王蕭朝貴南王馮雲山は先に已に戰死せしにより、今は五王一人も残る所なく、秀全獨り滅滿復明を唱ふと

雖も軍中命を奉ずるものなく、此儘にて押し行かば滅亡踵を回すべからざりしに、偶まアロー號事件起つて滅亡を免れたり。

アロー號事件は英佛聯合軍の役なり、原因は野蠻時代に免れ難き土人と外國人の衝突を根底として、咸豐六年(千八百五十六年)十月黃埔の官憲が英國々旗を揚げて居りし、噍馬船アロー號を搜索して清人十二名を逮捕したに初まる、元來此船は清國人が恣に英國旗を掲げしものなれば英人が怒る必要なきものなれど何か事あれかしと待ち受けて居たる香港知事ハーロー、スミス、パークス機に乗じて談判を試み要領を得ずと稱して英軍直ちに廣東城を衝て之を陥れしが時恰かも廣西にて支那人が佛國宣教師を殺せし事件を擡起せしより、佛帝ナポレオン三世亦好機乘すべしと爲し、是に於て英佛聯合軍を作り、咸豐七年(千八百五十七年)冬英佛聯合軍は廣東を陥れ、更に北上して白河に至り、太沽砲臺を陥れて天津に迫る、長髮賊の北上に苦みし清廷は事なからんを欲して六月桂良を使として、英公使エルギン、佛公使グローと會見して天津假條約を結び、償金四百萬兩を出して講和することゝなれり。

然るに咸豐九年(千八百五十九年)英佛二國の使節白河を溯りて前年の條約批准交換を爲さんとせしに、此時は僧格林沁太沽砲臺を修理したる後の事とて、同砲臺より砲を放つて撃退し、兩國使節已むなく退却して咸豐十年(千八百六十年)再び兵を率ひて北上し太沽砲臺を陥れ天津に至りて僧格林沁を破り、遂に北京に迫り、九月文宗蒙塵して熱河に走り、十月聯合軍北京に入りて圓明園の宮殿を燒掠す、幾もなく和議成りて英國に千二百萬兩、佛國に六百萬兩の償金を出し、二國の公使領事館設置、基督教公布の自由を許し、既開の五港の外に牛莊、登州、潮州、臺灣、瓊州、九江、漢口の諸港を開放することを許したり。

平和克復の翌咸豐十一年(千八百六十一年)文宗崩じ穆宗皇帝位に就く、然るに如上の外患却て長髮賊を利し、死灰再び再燃して勢當るべからず、石達開は綏寧東安を下し、陳玉成、李秀成等は、黃州、蕪州を取る、是に於て曾國藩總督欽差大臣となり、弟曾國荃、大常卿左宗棠等と共に連りに諸城を克復して、洪秀全の本據金陵に迫り、秀全亦之に應じ、李秀成、李世賢等は浙江を犯し、杭州の賊は寧波を陥れ、蘇州の賊は上海を陥れたり。

上海一たび陥るや外國人は猛然として起ち、米人フレデリック・ワルドを大將となして官軍を助けて賊を討つ而してこれより後この一隊長髮賊克平の中心となり、此外國兵なくば平定出来ざりしやも知れずと稱せらる。

外人の援助に力を得し曾國藩は穆宗皇帝同治元年(千八百六十二年)討賊の部署を定め、弟曾國荃をして金陵を、左宗棠をして浙江を、李鴻章をして江蘇を攻めしめたり。五月賊の勇將陳玉成は壽州城にて擒となり、同治二年四月石達開は老鴉漩河にて捕へられ、蘇、抗二州官軍に歸し、同治三年(千八百六十四年)六月曾國荃金陵を攻め、同月下旬洪秀全自ら藥を仰いで死し、李秀成等其子洪貴福を立てしも七月城陥り、秀成等捕へられ、貴福は一旦走りしも十月江西にて捕へられて斬に處せられたり、此役外人の助の大なりしこと勿論にて米人フレデリック病死の後には英人ゴルドン將軍代つて白人を指揮したりしなり。

洪秀全兵を金田に起して以來平定に至るまで十五年間、支那十八省の中十六省まで禍を被り、人命を損せしこと二十萬人以上に上る。朝廷戰功を録して曾國藩を太子太保、國荃を同少保、李鴻章、左宗棠を一等伯爵、僧格林沁を貝勒となし、其他

何れも功を賞すること差あり、實に我元治元年、日本も亦京師は長州會津の會戰あり、引續いて幕府征長の師を起し、世は如何に行くやらんと思はれし時なりき。

第九 長髮亂十五年間の三合會

前章にも述べし如く十五年間の長髮亂は三合會員が火を付けし儘株を洪秀全に取られたるものにて、羅大綱一派を除くの外三合會員はあまり關係せざりしも、而して先づ其導火を作りしは實に洪秀全が兵を擧ぐる道光三十年の前年道光二十九年(千八百四十九年)にありしものにて、陳正成といふ籍を有して外國人となりしもの、厦門に三合會の支部を設け七首會と稱して盛に土人を煽動し、之に加はるもの數千人、屢々富彙を劫かして強奪せしがこれ亦太平長髮賊興起の助となりしなり。

然るに咸豐元年(西曆千八百五十一年)陳正成逮捕せられ籍が外國にあを以て英國領事より引渡を請求せんとする間に拷殺せらる。是に於て黃威といふもの代りて衆を統べ二千の衆皆兵を取て起ち、進んで厦門に侵入して之を占領し、數ヶ月の後官軍と談判して厦門を開き安全に支那ジャンクに乗じて去り、彼等が去

りし後清國官憲は厦門人二千人を虐殺したり。恰も其頃廣東、福建兩省の三合會員にて上海にあるもの十五萬人ありしが、其中の一人なる廣東の人劉麗川、福建の人陳阿連等上海城を襲はんことを圖り、一旦捕へられたれども在上海の廣東福建人が沸騰するによりて官憲恐れて彼等を放還せり、然るに幾くもなくして麗川、阿連等孔子廟の祭典を機として、六百人の衆を上海城門外に伏せ、黎明開門を待て闖入し、知縣袁子才を斬り、道臺吳健章に迫つて官印を奪ひ終に上海城を強奪せり、彼等は皆頭に紅巾を着けて印となせしより紅頭賊と稱せらる、然るに在上海の總督何桂明、外國居留人の力を借りて城を攻むること十六日、麗川等力敵せざるを知て、死士百餘人を率ひて圍を潰て逃る、これ亦長髮賊亂の前年なりしなり。

三合會は長髮賊の騷亂中にも決して手を拱して傍觀せしにあらず、道光卅年兩廣各地に蜂起して洪秀全の亂源を作りし事は上に屢々述べしが如し、長髮賊の盛となるや三合會も亦勇氣を生じ、咸豐四年(西曆千八百五十四年)には廣東の各州及び廣西の全部皆長髮賊に加膽し、十一月には廣東の三合會員艦隊を醸し

て佛山に向ひ戦ふて四五十の清軍ジャンクを鹵獲し、多數の兵士を殺戮し、翌五年一月には珠江の戦に於て四十四隻の清軍ジャンクを鹵獲したり。

然るに頭目連の不和は却て清軍の乗する所となり、同年の末には到る處殘殺せられ日々刑せらるゝもの一日七八千人、廣東省に於て百萬の生命が奪はれたるは慘鼻の極といふべし、而も三合會は敢て屈せず、咸豐六年アロー號事件にて英國兵廣東城を乗取せし事と長髮賊の石達開の湖南より廣西に進軍せし事とは、痛く三合會の士氣を興奮せしめ、咸豐八年(西曆千八百五十八年)陳清康なるもの數千の軍を廣東の北方に集合し、廣東占領の謀を回らし、英佛同盟軍出發の後を待て革命の旗を擧げんとし時に桂林を攻撃せる長髮賊が清兵と戦ひ敗れ圍みを解て廣東に退き其一部三合會に合せしより士氣大に振ひたり。然るに英佛連合軍も長髮賊も去りし後支那官憲は三合軍の副統領陳政といふものを誘ふに利を以てし、陳政は利に迷ふて叔父にして頭領たる陳清康を殺すかくして三合會員は賄賂に酔ふて何等備へなきに乗じて、官兵は一舉之を襲ふて二千人を屠り、餘衆は遠く香港に逃れて外國保護の身となれり。

第十 同治の回匪

白蓮會敗れ、長髮賊亡び、三合會閉息せしと雖も支那の革命熱は決して冷却せしにあらず、咸豐九年(西曆千八百五十九年)内には長髮賊の亂あり、外には英佛聯合軍との葛籐未だ解けず、翌年咸豐帝熱河に蒙塵せし程の國難多事の時、西南邊疆の弛むに乗じて回々教を奉ずるもの亦集つて亂を爲し、特に雲南省の回匪大に強くして其勢當り難く、髮賊の亂平ぎて後も所在賊起りしを以て、同治四年(千八百六十五年)僧格林沁之を防いで鄆城に戦死し、曾國藩亦病を以て軍務を辭せしより李鴻章専ら征匪の任に當るも容易に平定せず、同治六年(千八百六十七年)に至ては雲南回匪の徒大理、麗江、永昌、順寧の四府を陥れ、翌同治七年(我が明治元年)これより後は西曆を日本年號に改むには回匪三十萬人雲南省城を圍むに至るこれと同時に長髮賊の殘黨汪海洋、李世賢等も又活動し始めしが左宗棠、李鴻章及び新たに任用せし劉銘傳等力を協せて、長髮殘黨を平げ、同治十一年(我が明治五年)大理を陥れ、翌十二年(明治六年)順寧、雲州、騰越に克ちて、終に雲南の回匪を平げたり。

第十一 寧山の三合軍

其後清國政府は外國との交渉に忙殺され居る間に、光緒十二年(我が明治十九年)廣東省惠州府寧山に於て、官吏の壓制に對して三千の三合軍が起りしも直ちに撃退されて、香港より石工の隊に成れる四百の應援隊の來りし時分には最早平定せし跡にてホヤ位の處にて濟みし事あり。

第十一 哥老會の隱謀メーソン事件

寧山の事件は光緒十年(我が明治十七年)清國が佛蘭西と戦ひ創痍未だ癒わざるに乗じて起つ考なりしならんも、結局何事も爲し得ず終りたり、然るに光緒十七年(我が明治二十四年)メーソン事件あり、初め哥老會の首領に關照明なるものありて、部下に李豊といふ豪富ありき、李豊の父李昭壽は原と淮北の無賴漢にて長髮賊李秀成の部下なりしが、清軍天長縣を襲ひし時戦を逆まにして清軍に下り其功によりて三品頂戴の身となりしも後事を以て安徽に刑せらる、李豊一念此父の讐を復せん爲に哥老會に入り復讐の爲に六萬兩を鎮江に送り、當時鎮江税關吏たりしメーソンに三萬兩を渡して武器の購入を依托し、メーソン之を承

諾して香港にて多量の武器彈藥及びダイナマイトを購入し密に之を鎮江へ輸入することを企てしが、メーソンの僕及び彼と連絡せる支那人陰謀の嫌疑を以て捕へられ委細を白狀せし爲にメーソンは捕縛せられ上海の裁判にて九ヶ月の禁錮となり、上海及び他の殖民地を追放せられ、李豊も捕へられて獄中に自殺し、其妻妾も亦自殺し、關熙明も死刑に處せらる、而して其結果長江一帯は外人に對する悪感を買ひ、沙市の日本領事館までが焚かれし程なりさ。

第十三 五軍山の哥匪

光緒十八年(我が明治二十五年)江西湖南の醴陵にて四人の哥老會員捕へられ、二人は死刑に處せられしにより、二千の會員一時に蜂起し残り二人の同志を獄中より救ひ、五軍山中に籠り、官兵の向ふに任せて忽ち潰ゆ。

第十四 清國革命黨廣東城の失敗

支那秘密結社の内にて近世的智識によりて組織せしものは、今回武昌、漢口にて兵を擧げ十八省を動亂せしめつゝある革命黨のみなるべし、これを興中會とらひ、前にも述べし如く光緒十八年(我が明治二十五年)に創立されしものにて而し

て我日本人に最も多くの知己を有す。

興中會は孫逸仙、陸皓東、楊飛鴻等によつて設立されしも、首領は實に孫逸仙也、孫逸仙、名は文、逸仙は其號、廣東省香山縣の人、十七の時香港に於ける博濟醫院に入り、英人ドクトル、カントラーに従つて醫藥を學び、業成つて後、澳門に於て醫師となり、大に土民の信用を博せしが、夙に憂世の志を抱き醫業を擲つて廣東に還り、陸皓東等と興中會を起す。

然れども興中會は新しくして會員少なく、廣東、福建兩省の人は多く三合會に屬するを以て、交を三合會に訂して密に時機の到るを待ちしに、恰もよし光緒二十年より二十一年(我が明治二十七八年)に亘りて、日清戦争起りしにより逸仙は機乗すべしとなして、密かに武器及彈丸を購入し、兵を汕頭、西河、香港の三處に募りしも、已にして清軍大敗し、馬關條約となり、日清戦争の幕閉ぢられしを以て、孫逸仙等は機會を失し、而かも猶起せし事業は何等かの形式にて現さるべからざるを以て、潜に諸方の兵を招きて城中に入らしめ、一擧して廣東城を奪はんと思はしが、發するに先だつ一夜事發覺して、陸皓東以下數人は縛に就き、孫は辛ふじて

身を以て澳門に逃れ、更に香港に到りて日本へ渡航す、當時支那政府のお尋ね者となりし者の重なるものは孫逸仙、夏亞伯、李亞舉、李芝南、劉秉祥、朱浩清、陳少白、王質甫、湯亞才、吳子才、莫亨、陳煥州、候艾泉、魏友琴、黃麗彬等なりし、實にこれ光緒二十一年我が明治二十八年十月の事也。

孫逸仙は横濱より布哇を経て米國に上陸し、轉じて英國倫敦に遊び一旦清國公使館に捕へられしも、孫の舊師カントリー氏救済に力むる所あり終に英清兩國の外交問題となり、時の總理大臣サリスベリー侯の交渉にて孫は終に解放せられ、*Sum. yae. snt. kidnapede in London.* と云ふ書を著して英國を辭し、米國を経て我日本へ來る、實にこれ光緒二十三年(我が明治三十年)なり。

第十五 大刀會獨逸の餌となる

明治三十年革命黨の孫逸仙再び我邦に來りし年、白蓮會の分身たる大刀會の首領劉士端、彭桂林、趙天吉等、黨を集めて山東省袁州府の耶蘇教堂を破壊し、獨逸宣教師二人を殺す、此事却て獨逸をして好口實を作らしめ突如として膠州灣を占領し、清國政府之が爲に被害宣教師の救恤費二萬四千兩、及び教堂建築費六萬六

千兩を賠償し、膠州灣九十九ヶ年の租借を准許し、膠州灣より濟南府に到る鐵道の敷設權を讓與し、且つ鐵道沿路の鑛山採掘權を與ふ、之に關聯して白蓮會の分身たる小刀會なるもの、獨逸の膠州灣占領を憤り書を獨逸の軍營に送りて宣戰を公にせしも、清廷の警戒嚴重なるため事を擧ぐるに至らざりき。

第十六 各秘密結社の連絡

光緒二十三年乃ち我が(明治三十年)孫逸仙再び日本へ來りしより支那の秘密結社は愈々世界的の舞臺に移れり、初め孫の日本に來るや頭山滿、犬養毅、平岡浩太郎の三氏は非常なる同情を以て之を庇護し、雇語學教師の名義にて麴町に住ましめ、後早稻田近邊に移らせたり。

一方日本の志士は急に支那漫遊を思ひ立ち、此年の冬革命黨の畢永年、林述唐と共に湖南に之き、哥老會の頭目李雲彪、楊鴻均、張堯卿、李某に會して孫逸仙の人物を紹介し、楊子江沿岸の各頭目を集めて英雄會を組織せんと謀れり。

翌光緒二十四年(我が明治三十一年)日本の志士は先輩の意を享けて再び清國に

赴き、會々康有爲、梁啓超の逃亡するに逢ひ相伴ふて日本に返り孫逸仙と會見せしめんごせしも康梁の徒避けしを以て事成らず。

蔑もなく畢永年、唐才常等亦日本に來りしを以て志士は畢永年を伴ふて支那に行き、途漢口にて林述唐なる支那志士に逢ひ哥老會の頭目李雲彪、張堯卿等に會して孫逸仙の人と爲りを紹介し、翌光緒二十五年(我が明治三十二年)畢永年、湖南哥老會の頭目七人を伴ふて香港に來り、革命黨乃ち與中會の首領、及び三合會の頭目と會見せしめ、新に興漢會を起し孫逸仙を推して首領となす、これにて哥老會、三合會、與中會乃ち革命黨の連絡が通じ、白蓮會一派を除くの外は握手するこゝとなれり。

第十七 廣東の三合匪

光緒二十四年(我が明治三十一年)日本の志士が支那の秘密結社連合を企て居りし時、三合會の頭目李立亭、洪振年等兵を廣西省鬱林、南寧一帶に起し、連りに諸城を陥れて全省を席捲し、餘す所僅に梧州、桂州のみなりしも、十數ヶ月の後清軍の鎮定する所となる、此役十ヶ月も續きしにより一時は人をして長髮賊の二の舞

かごまで思はしめたりといふ。

第十八 義和團の北清事變

哥老、三合、興中の三會が握手しつゝある間に、光緒二十六年(我が明治三十二年)義和團の北清事變起る、義和團は白蓮會一派の秘密結社にて他の三會と聊か趣を殊にして當時猶文明に浴せず、念誦咒咀を以て彈丸を避くると稱し、拳棒を傳習するを以て宗旨となし、頑冥固陋、一風違ひに扶清滅洋といふ向ふ見ずの旗を擧げ、山東直隸の各地に蔓延し、此年四五月の交より外國宣教師を殺し、耶蘇教會堂を焼き其勢猖獗にして清國政府鎮壓すること能はず、是に於て日、英、米、露、佛、獨、伊の列國聯合軍を起して討伐に従事し六月十七日水兵の聯合陸戰隊太沽の砲臺を陥る、此役我が服部中佐突進して名譽の戦死を遂げ、白石大尉先登して旭旗を砲臺に懸へす、當時團匪北京に入り清帝、西太后と共に西安府に蒙塵し、各國公使重圍の中にあるより各國共に氣が氣でなく、進で天津に向ひしも團匪頑強にして屢々列國聯合軍を苦ましむ、然るに我山口中將第五師團を率いて太沽に上陸するや一擧天津城を陥れ、更に長驅して七月十四日北京城を陥れ、各國公使等を

重圍より救ふ幾もなくして清廷慶親王、李鴻章等を委員として和を請はしめて事竟に平らぎしが、義和團を勦定せしは實に我が第五師團の力なるは今猶人の記憶する所なり、此役清國各國に向つて四億五千萬兩の償金を出す。

第十九 哥老會漢口の敗

義和團の一擧は痛く支那の革命思想を抱けるものゝ心を動かし、義和團が事を擧げし光緒二十六年(我が明治三十三年)哥老會の一派なる同仇會の馬福益、唐才常と約し湖南にありて兵を擧ぐるの準備を爲し、將に事を發せんとして漢口の機謀漏洩し、唐才常以下數人張之洞の殺す所となる、馬福益の總參謀官劉佐楫、事已に敗れたるを見て禍の其身に及ばんことを恐れて、罪を償はん爲に同盟者の姓名を密告せし爲に頭目の二人は捕へられ、馬福益僅に身を以て免れ、廣東にありし李雲彪、楊鴻均は一旦上海に至り、康有爲、梁啓超等に結ばんとせしも、議合はずして廣東に歸り、幾もなくして惠州事件起るに及び官兵中の哥老會員を操縦して三合會の爲に盡さんとせしが、此事遂に成らずして止む。

第二十 革命黨三合會聯合の惠州亂

義和團の興起、哥老會の擧兵準備等ある時に革命黨及び三合會が默止して居るべき筈なし、光緒二十六年孫逸仙我邦にあり、義和團の亂を聞て好機到れりとなし、再び革命軍を起さんことを圖り、福本日南、末永純一郎、中野徳次郎等亦之に加はり、頭山滿も大に斡旋する所あり。

恰も此時李鴻章、孫逸仙に會見を求め來りしにより、康有爲と孫逸仙を結合させんとして幾度も成功せざりし日本の志士は孫を擁して先づ新嘉坡に向ひ、康と會して後香港にて李鴻章と會見せしめんとせしが、これも亦間違ひし上剩へ滔天宮崎寅藏の如きは新嘉坡にて五日間獄に投せられて五ヶ年間追放の命を蒙るに至れり。

是に於て孫逸仙は新嘉坡より香港に來る船中にて擧兵の事を謀る、其相談相手は日本の志士と三合會の首領鄭弼巨なりしが、當時議容易に決せず、船海洋に止まること五日、終に三合會の鄭弼巨を軍司令官、革命黨の楊飛鴻を財務長官、畢永年を民政長官となし、參謀總長には日本人某紳士、外務長官も亦日本人(此二人は今度も參謀長と外務長官となつて現に黎元洪の左右に居るといふ風評だから

暫く匿名とするに托することとし、福本日南は香港にて資金募集の任に當ることとなり。

然るに其後亦同志の議合はず孫逸仙を初め相前後して日本に返り、孫は更に上海に向ひしが幾もなくして哥老會の漢口失敗あり、是に於て在上海東亞同文書院の幹事山田良政慨然起つて、三合會の鄭弼巨をして事を舉げしめんと決したり。

此時廈門の本願寺放火事件あり、我政府將に兵を送らんとせしが、此放火は日本が廈門占領の志ありて自ら爲せる所なりとの風評立ち列強の軍艦十數隻早くも廈門に入りしより、我陸兵を載せたる軍艦は廈門から召還せられたり、但し此事が惠州軍に關すべきや否やは今の問題にあらず。

而も孫が深く日本に頼む所ありしは事實なり、彼は日本の志士と共に臺灣に至り重要な日本人に會見して何等か諮る所やありけん、臺灣にありて革命軍を指揮し、革命軍が廈門に入るを待つて之に投せんと欲して、臺北に一戸を借て住し、三合會の鄭に打電して惠州革命軍を起し、廈門に向つて進軍すべき事を命じ

じたり。

是に於て鄭等は孫逸仙の指揮により廣東省惠州に於て革命の旗を擧ぐ、然るに此時日本にては山縣内閣仆れて伊藤内閣起り、平和主義なる伊藤公は孫逸仙を放逐して臺灣を去らしめたるにより、革命軍の策源地先づ解散したり。

惠州軍はかゝる事とは夢にも知らず、兵を三州田の山寨に集めて孫逸仙より命令の來るを待ちしに却て廣東總督の覺る所となり、兵を發して三州田を攻めしにより、今はとて一同兵を取て起ち夜に乗じて之を襲撃し、二百の官兵を走らせし折、孫より舉兵せよとの電命あり、一同廈門に向つて進軍し敵を佛子拗に破りて其將杜鳳梧を擒にし、洋銃七百挺を奪ひ、更に五千の敵を破りて提督劉萬を負傷せしめ、洋銃六百、彈丸數萬發を奪ひ進んで崩岡に到りし時分には總計二萬の同勢となり、勢天を衝くの概がありしも、會々香港より孫逸仙の形勢一變外援期し難く廈門に到るも接續の見込なし、請ふ進退を決せよとの電報に接し、士氣沮喪して終に潰裂し、日本の志士山田良政は全軍潰裂の際、清兵に追跡せられて戦死したり。

第二十一 中國同盟會の成立

明治三十三年の革命亂は此の如くにして終りしが、これより支那に文明思想油然として起り、日本に留學するもの多く章炳麟も黃興も皆我日本に來遊し、明治三十八九年即ち日露戰役終結の時分には支那人にて日本に留學するものは一萬人以上に及び、湖南の黃興乃ち今回革命軍の大都統、直隸の張繼の二人は隱然として其牛耳を執りしが、會々孫逸仙歐米より日本に返るに逢ひ黃興等の首唱にて、一大歡迎會を富士見樓に開き、各派聯合して中國同盟會を組織し孫を以て首領となして、左の六綱領を決議す。

- 一、現今の惡劣政府を顛覆すること。
- 一、共和政體を建設すること。
- 一、世界真正の平和を維持すること。
- 一、土地國有を主張すること。
- 一、中國日本兩國の國民的連合を主張すること。
- 一、世界列國に中國の革新事業を賛成せんことを要求すること。

以上の決議は近世革命黨等の主義と見て然るべく而して此會成立の後彼等の多くは皆支那に還りたり。

第二十二 滿洲馬賊と白蓮會

哥老會、三合會が革命黨と握手し中國同盟會成立しつゝある際に白蓮會一派は如何なせしか、義和團滅亡以來最早生氣なきか否々、白蓮會の別派に在理教なるものあり、依然として勢力を有し、河南、直隸、山東、滿洲方面に蔓延す、而して其最も盛なるは滿洲の馬賊なるべし、馬賊と聞けば三十七八年役如何に露兵を苦しめたりしかは今猶人の記憶する所、此馬賊亦革命黨員張繼、宋教仁等が滿洲に至り之と連絡を取りしたため、馬賊の頭目、季逢春、朱二角、金壽山、王飛卿、揚國棟、孟福亭など三十餘人何れも中國同盟會の會員となりしといふ。

第二十三 馬福益の再舉

光緒三十年(我が明治三十七年前年漢口にて失敗せる哥老會の馬福益、黃興と謀りて將に大事を擧げんと企てつゝある時、陸亞發先づ兵を廣西に起して柳州城を破り、洋銃五千挺を奪ひしを以て、廣東總督大兵を發して之を討ち、陸亞發急を

馬福益に告げしにより、馬は三十六人の正龍頭、七十二人の副龍頭を召集し、十月十日を以て事を舉げんとせしに、事發覺して九月十五日南路正統領蕭桂生、西路副統領游得勝の二人捕へられ、馬も亦捕縛せられて瀏陽門外に斬られ、陸亞發も軍敗れて捕獲されたり。

第二十四 湖南の暴動

光緒三十二年、我が明治三十九年の湖南暴動も亦、哥老會員の活動なり、此年江西の炭坑々夫に紛争あり、故馬福益の殘黨は機乘すべしとなして、其哥老會に屬する坑夫を率いて兵を起し、所在の城を陥れ、將に長沙を衝かんとせしを以て、南京總督、湖廣總督等忽皇として兵を出し、交戦二十數回の後、革命員等は彈丸缺乏して天坪山に退却し、終に四方に散亂す。

第二十五 徐錫麟、秋瑾女史の死

妙齡の處女秋瑾女史が一昨年刑場の露と消へしは、今猶人の記憶に存せん、事の起りは浙江の人復古會なるものを設け、徐錫麟、陳伯平、馬宗漢、秋瑾女史など、其會員となる已にして同會が人の目に付くやうになりしより、更に光復會といふも

のを組織し大通學堂を起して徐ろに革命軍の起るを待たんとし、徐錫麟は大金を擲て候補道臺の官を得、安徽巡警學堂の會辦となりて兵權を攬て大事を圖らんとせしも、巡撫が革命黨を物色すること甚しきより、徐先づ發して巡撫思銘を擊殺し、事竟に破れて徐は刑せられ、陳伯平も馬宗漢も而して秋瑾女史に至るまで刑場の露と消ぬ。

第二十六 廣東省城の暴動

廣東省城の暴動は、今春の事なるを以て、今猶人の記憶に新し、此舉は黃興一人の企にて、廣東なる三合會員、哥老會員を糾合して將に一舉して廣東城を乗つ取らんと企てしも、謀未だ成らざる前に事發覺せしを以て、窮餘の策として、決死の青年を率いて廣東省城に乗り込み、總理衙門を焼き、陸兵を追ひ拂ひしが、西江より砲艦を以て反軍を攻撃せし爲めに、あたらず有爲の青年を清兵の彈丸の下に殺し、黃興僅に身を以て免る、當時黃興と共に廣東省城に乗り込で討死をなせし林黃塵、劉元棟、陳興業、林覺民、林尹民、方聲洞、陳可鈞、陳更新などは、皆日本へ留學せし人々なり、其外幾百人の志士を廣東城門外の屍とせし責は、黃興が無謀の乗り打

に歸せざるべからざるべし。

第二十七 南清志士多し

秦山楚水英雄起つ處地形宜し、誰か道ふ清人南に弱く北に強しと、忽必烈趙家の老寡婦を噛み、愛親覺羅明末流賊の變に乗じたるを以て直ちに南弱北強を主張せんには未だ兵を談する人たること能はざる也。

之を古にして北方の強秦を亡せし千古の快男兒楚の項羽は下相に生れて兵を吳(蘇州府)に起し、漢家四百年の基を定めし漢高祖は沛(江蘇省徐州府)の豊邑の人古來支那英雄多しと雖も誰か此二人に勝るものあらんや、而して共に楊子江東に出で、志士は南清特産たるの實を示せり。

漢家亡ぶるや孫權大江を阨して曹操の軍をして一步も江南を踏ましめず、以後世支那官家南を守りて王祚を保たしむるの端を開く、今其古きものを暫く措くも清起つてより三百年前項詳叙せる如く初め湖北の白蓮教匪より終り今次の革命亂に至るまで、何れか南清志士の身を賭して奮闘せる事蹟ならざる、蓋しこれ項羽高祖の血脈を引き江東八千子弟の苗裔として、文字乏しきものは演義

三國誌、水滸傳に南清の地形と人情を教へられ、文字あるものは太史公の千古の奇文一部の項羽本紀に養はるゝにあらざるを知らんや。

因て憶ふ幕末勤王の大儒森田節齋先生、好んで史記の項羽本紀を讀み終に之を背誦す、一日京師に遊び春日潜庵と飲み歸途項羽本紀を高誦しつゝ歩み、腰刀の脱出するを知らず、腰軽くなるに及で其紛失に心付き一絶を賦して曰く、斷雲殘月影依稀、行誦重黜趙曲紀、讀到沈船渡河處、不知腰間化龍飛と、日本人猶且然り南清の人豈項羽と高祖を忘れんや、北清の人往々荆軻に類し、南清の人項羽を學ばんとするは事實の常に我等に教ゆる所也。

清興つてより以來髪を戎狄にし服を夷蠻にし、漢人の勢力地を拂つて莫し、其今日之の如く北京朝廷をして猶且漢人全盛の世たらしめしは實に長髮亂の力なり、而して長髮亂の力は頓て南清人の力也。

太平天國主洪秀全は廣東花縣の人、南王馮雲山も亦同邑の人、東王楊秀清は廣東花縣に生れ、西王蕭朝貴は秀全の妹婿、翼王石達開は秦日綱と共に皆貴縣の人に於て、南清の子弟豪傑を提げて天下に横行すること十五年、支那十八省の中十六

省まで其蹂躪する所となる。南清志士の勇氣復盛なりといふべし。而して朝廷徒らに驚遽狼狽策の施す所以を知らず、此時に當つて之が勦討の功を全ふせしは滿人にあらず、北清人にあらず、實に南清湘郷の人なり。洪秀全兵を廣西に起し、海内騷動するに及び、湖南新寧の江忠源起つて義旅を唱へ、王公彝、羅澤南、諸生を以て起り、其後李續賓、胡林翼、左宗棠、李鴻章、劉長佑、蔣益澧、曾國荃、彭玉麟、楊岳斌、劉錦棠等の湖南の志士志を共にして征伐四出し、兵を十八行省に用ゐ、湘郷の人劉岳昭、劉坤一、楊昌濬、李續宜、劉峇、唐訓方、陳士杰、田興恕、江忠義、勞崇光、郭嵩燾、譚鍾麟、黎培敬等ありて皆軍を助く、而して之を總ぶるものは實に清朝第一人、儒雅忠厚にして果斷あり、撥亂反正の功を奏せし湖南省湘郷の人文正公曾國藩也。

然らば則ち長髮亂の起るや南清の人之を亂りて南清の人之を克平す、宜なるかな北京朝廷漢人の勢力を挽回せしや。

爾來今日に至る動亂の主客何れも南清の人にあらざるなし、孫逸仙も黃興も南人なり、袁世凱も亦南人なり、之によつて見れば次で起るべき支那の主權者は夫

れ南清の人乎。

第八章 今次辛亥の革命亂

突如として一波萬波を傳へて支那全國を擾亂せし今次の革命亂は如何にして起れる乎。

今年十月の初武昌に情報あり、革命黨の巨魁黃興其黨與を率いて武昌に乗り込み、中秋の夜(十月六日清曆八月十五日)を以て事を起すべしと。是に於て十月五日總督衙門に於ては最も警戒し、憲兵隊、特別警察隊、消防隊、巡警隊、巡防隊等を衙門に配備したる外更に第八鎮の歩兵一隊、馬兵一隊、工兵一隊を門外に警固せしめたり。

然るに六日には何事もなかりしより總督衙門にては大搜索を行ひ、十月八日夜十二時劉堯徽、邱和尙なる二人の革命黨員を捕縛す、二人共に日本に留學せしものなりといふ、問訊すれども何事も自白せず、忽ちにして今夜革命黨事を舉げんとすと傳ふるものあり、武昌第八鎮統制張彪自ら指揮して拿捕に従事し、革命黨

潰散して其中二十七名捕はる。

十月九日武昌城門を閉ちて大に革命黨を搜索す、市面震驚し人心惶々たり、湖廣總督瑞徵、張彪と謀りて拿捕せし黨員を訊問す、彭曾範なるもの最も強頑なり、自ら道ふ湖北陸軍特別警察隊一隊一棚の正兵と復た他をいはず、乃ち正午十二時劉堯徽、邱和尙、彭曾範の三人を西轅門に斬る。

此夜午後九時漢口露國居留地に於て革命黨二名及び女革命黨一人を捕ふ、九時半より再び武昌城内の大捜査に従事す。

十日午前一時九日夜の接續捜索隊一憲兵が某人と私語するを發見し之を誰何す、憲兵某と共に爆烈彈を投じて遁れ將に吳公館なる家の後墻を踰へて逃れんとす、乃ち二人を逮捕し併せて吳氏の一婦三男を捉へ去りて翰訊す、憲兵名は彭澤藩、武昌縣の人年二十五歳亦革命黨なり、午前二時更に十六名の革命黨を捕ふ一名は年四十、二名は二十餘、其餘何れも二十に満たず並びに已に髪を剪る、午前四時二十分東轅門口陳案庫前に於て彭澤藩を斬る。

十日午前五時天已に明く、彭澤藩と語り居りし某を訊問し七時亦陳案庫前に於て斬に處す。

此朝吳公館に於て火藥一箱を發見して更に嚴戒する所あり、九時某なるものを翰訊して亦陳案庫前に於て斬に處す、同時に形跡の疑ふべき軍人らしきもの及び婦人一名を捉へ來り、之を翰問す、此軍人は三十標管右隊排長張廷甫なるもの瑞總督目して革命黨となして之を殺す、此時日舛ること已に三竿、遠近督院の外に來り觀望するもの萬餘人、物情騷然たり。

已にして此夜(十月十日)九時民家火を失す、彭澤藩及び張廷甫の如き軍人を殺せしに激昂せる工兵第八營の左隊、防火の鐘聲を聞と共に突然立て白布を纏ひ、督隊一名排長四名を殺す同時に城外の輜重隊火光を望見し亦督隊を殺し隊を整へて出て砲兵騎兵之に従ふ、城内三十標の三營は旗兵に屬し、二十九標は營兵なり是に於て此兩歩兵相戦ひしも砲兵蛇山に據り營兵を助けしにより旗兵戦はずして潰へ、内外相應じて大舉火藥庫を占領し進て督署に迫れば總督瑞徵已に逃れて船にあり、將軍張彪亦旗兵を率いて遁る。

十一日黎明督署を焼き混成協黎元洪を推して大都督となし、諮議局正議長湯化

龍を推して正參議とし、署して「中華民國軍政府鄂都督黎」と爲し、黃帝紀元四千六百〇九年と署す。

十一日革命軍使三十人漢陽兵器廠に赴き命を傳へて占領す。

十二日漢陽守備兵悉く逃亡し漢口亦戍を失ひ五時三十分漢口確實に占領せらる。

此報北京に傳はるや舉朝狼狽し瑞徵を督して叛軍を征討し罪を償はしめ、薩鎮冰を水師提督として應援せしめ又陸軍大臣蔭昌をして兵を率いて赴き救はしむるの上諭を發す。

十三日革命軍首領黎元洪其獨立を在漢口の各國領事に通牒す。

十四日北京政府は時局に鑑み袁世凱を湖廣總督に、岑春煊を四川總督に任じ、湖廣總督瑞徵及び四川總督趙爾豐に革職を命じ、且袁に委するに兵馬の權を以てし、湖北第八鎮統制張彪に亦革職を命ず、其家族が日本に避難し來れるは人の知る所なり。

此時に當つて北京政府は全力を武昌革命軍攻撃に注ぎ、次第に大軍を南下せし

めて十八日より戰爭を開始し、兩軍互に勝敗あり、二十日革命軍官兵を敗りて江岸停車場を占領す。

二十二日には宜昌戰はずして革命軍の有となり、湖南の沙市、長沙、安徽の蕪湖、安慶皆將に革命旗を揚げんとし、尋で長沙陥落し、九江、湖口亦陥る、但しこれ武昌の革命軍には交渉なき獨立部隊たることは勿論なり。

武昌一たび革命の火を縦ちしより飛火已に八方に散る、革命男兒の孵化場たる廣東、沈黙するの理あらんや、二十五日廣州將軍鳳山廣東に上陸する時、爆裂彈を投ずるものあり、將軍從者十數名と共に粉死す、此日西安亦反し革命軍の陥る所となる、西安は古の長安にして陝西省にあり。

此時に當つて北京の資政院亦次第に革命の色彩を帯び來り、二十二日開院後引續き開會中なりしが二十五日突然滿場一致を以て郵傳大臣盛宣懷を彈劾し、憲法に違反し、越權の處置を爲し、叛亂を激成す、罪死に當ると決議上奏せしを以て二十六日盛は罷免せられ、獨逸保護の下に青島に逃れ去れり。

内にありて資政院が將に革命の色彩を帯んとするに際し、外には蔭昌將軍二十

六日を以て漢口を恢復したりと雖も、二十七日甘肅省蘭州反し、湖南の九江全く陥り、岳州叛き、福建軍隊叛亂し、二十八日廣東の紳商自治に關する三箇條の決議を爲して廣東獨立を宣し、山西省太原叛き、山東省獨立を宣し、滿州亦獨立を企て、二十一行省將に瓜分せられんとす。

遮莫れ外患は猶遠方にあり、恐るべきは資政院の内薄なり、盛宣懷の彈劾に功を奏せし資政院は餘威に乗じて二十七日、時局危迫せるを以て民心に従ひて騷亂を止むべきの上奏案を提出したり、曰く一、皇室内閣を廢止すること、二、憲法は人民協賛を経て制定すること、三、國事犯者の赦免を爲すこと、四、國會を速開すること、偶々奉天第二十師團張紹曹以下數名より全軍隊の意思を代表して十二ヶ條の提案を爲し、若し容れられずんば兵力に訴へんと強要し來り、其意資政院決議と略同じく、爲に資政院の態度一層鞏固となりたり、十二個條の提案左の如し。

第一、大清皇帝は萬世一系たる事。

第二、國會を開設し本年内に議院を召集すること。

第三、憲法の制定は國會において起草し君主の名義を以て之を宣布し君主は

之を否認するを得ざる事。

第四、條約締結及び講和の事は國會之を決し皇帝の名において行ふ事。

第五、海陸軍は皇帝之を統率し國內において兵を用ゆる事は國會の決議を経る事。

第六、誅殺は勿論、治に就き法を正すことは命令を以て施行せざる事。

第七、國事犯囚を特赦する事。

第八、責任内閣を組織し總理大臣は國會之を選擧して皇帝の勅任を経、國務大臣は總理大臣之を推擧する事、又皇族は國務大臣たるを得ざる事。

第九、憲法改正の發議權は國會之を有する事。

第十、本年度豫算未決の分は前年度豫算によりて支出するを得ざる事。

第十一、人民の負擔増加は國會之を議決すること。

第十二、憲法、議院法の制定は軍人之に參與する事。

二十九日上奏、即日裁下せられ、幼冲の天子は三十日を以て「皇族内閣廢止の上諭」憲法草案附議の上諭、「革命黨大赦の上諭」を下し、更に「皇帝親ら答むるの上諭」を

下したまひ、皇太后は内帑百萬兩を出して武昌征討の軍を犒ひ、これより支那には革命黨なる政治の一派を認めらるゝに止まり叛徒と目すべきものなきに至る。

十一月一日慶親王以下現内閣員を總て罷免し、袁世凱を以て内閣總理大臣と爲し新内閣を組織せしむ。

二日資政院は慶親王以下元の各大臣の列席を求めて憲法大綱十九條を決議し直ちに之を上奏したり、憲法大綱は左の如し。

第一條 大清國皇帝は萬世不易なり。

第二條 皇室は神聖にして侵す可からず。

第三條 皇帝の權は憲法の規定する所を以て限りとす。

第四條 皇位繼承は憲法の規定に従ふ。

第五條 憲法は資政院の規草議決により皇帝之を發布す。

第六條 憲法改正提案權は國會に屬す。

第七條 上院議員は國民の法定特別資格あるもの之を公選す。

第八條 總理大臣は國會の推舉により皇帝之を任命し其他の國務大臣は總理大臣の推舉により皇帝之を任命し皇族は總理大臣其他國務大臣並に各行政長官たることを得ず。

第九條 總理大臣國會の彈劾を受くる時は國會解散にあらずんば内閣辭職す但し全一内閣は二度の解散を行ふことを得ず。

第十條 陸海軍は直接皇帝統率す但し陸海軍を國內に對し用ふる所は國會決議の特別條件により此外には使用することを得ず。

第十一條 命令を以て法律に代ふることを得ず緊急命令の特別條件に従ふものを除くの外は施行法律及び法律の委任する所を以て限りとす。

第十二條 國際條約は國會の議決を経るに非ずんば締結することを得ず但し宣戰講和は國會開會期中に非ざる時は國會の追認を受く。

第十三條 官制官規は法律を以て定む。

第十四條 本年度豫算にして未だ國會の議決を経ざるものは前年度豫算に照して支出することを得ず又豫算外に非常財政處分を行ふを得ず。

第十五條 皇室經費の制定及び増減は國會の議決による。

第十六條 皇室大典は憲法と牴觸するを得ず。

第十七條 國務裁判機關は兩院により之を組織す。

第十八條 國會の議決事項は皇帝により之を發布す。

第十九條 以上第八第九第十第十二第十三第十四第十五及び第十八の各條

項は尙ほ國會開かれざる以前は資政院に適用す。

十一月二十六日攝政王皇帝に代りて文武百官と共に太廟に賽して憲法信條制定の宣誓式を舉行す其略に曰く。

太宗皇帝仁政を貽すこと宏遠三百年の久しきに垂る、皇孫仰銘、競々として先朝の大業を享て、孜々として勗むるも、耀仁行政宜きを得ず、上下人心の隔離を來し終に國家の擾亂を醸す、斯くて累世相承の大業を顛覆せんことを深く懼れ、爰に資政院上奏の憲法信條を裁可し列祖列宗の神前に慎みて宣誓す。

資政院の躍起功を奏し支那革命の平和的成功を告げたりといふべし。問題は半ば終結したり、然れども外部の騷亂は依然として大なり、十一月三日中

立地帯たる上海に革命軍顯はると見るや、忽ちにして刃に衄らずして革命軍の占領地となり、中華民國軍政府の本營を上海に設け、度支、外務、民政、軍事、商務等の十七分課を置き、大都督黎元洪、總司令官李桂中、副司令官陳漢欽、外務官伍廷芳、民政官李平書、商務官虞洽卿、財務官沈漫雲等夫れ々任命する所あり、此時に當つて雲南省、廣西省、梧州、江蘇省、杭州、蘇州、及び浙江省も獨立を宣言し、十一月四日南京は諮議局自ら獨立を宣言し、鎮江は何等の戦闘もなくして陥落し、浙江省嘉興、甯波、鎮海、及び江蘇省、長州、紹興などの砲臺は戰はずして革命軍に下り、山東省は人民大會を開いて獨立を宣言す。

十一月三日武昌に於て黃興を以て中華民國大都統に定め、午後二時革命黨大本營の廣場に祭壇を設け、約二中隊の兵員之を守り、大都督黎元洪參列の上、都督より寶刀を捧げ、黃興之を受けて、恭しく鞘を拂ひ、天地神明に誓つて革命の大事を宣言する所、日本の舞樂にあらずんば支那の三國誌式なり。

此の如く芝居じみたる中に草木皆靡くと思ひきや、四日南京諮議局が革命黨に一致することを議せし下より、江南提督張勳獨り頑として聽かざる爲め、七日朝

に至りて俄然として形勢一變し、張勳二萬の勇士と共に南京城を死守するに決してより、總督張人駿も將軍鉄良も如何ともすること能はず、指をくわへて其成を仰ぐのみ。

火は徒らに擴がるのみにて殆ど收拾すべからずと見へしにや、各國共に北京居留民保護の必要を認め、帝國政府亦十一月二十六日を以て東京駐紮各國使臣に對し、帝國の意思を宣明して北京の形勢險惡なる爲、北清駐屯軍を減せざる以前の兵數に復舊増員することを通告し、二十八日を以て名古屋第三師團より歩兵一大隊機關兵一隊合せて約七百五十人を輸送し、各國も亦増兵し、將に舞臺は世界の問題に移らんとしたり。

然るに形勢亦走馬灯の如く變じ、曩に漢口を恢復せし蔭昌將軍銳を養ひ士氣を整へ、十一月二十七日大舉漢陽を陥れて之を恢復し、鉄工所、兵器廠復官軍の有となり、大別山に砲列を布きて將に武昌を下瞰して砲撃せんとするに至り、革命軍の兵氣頓に衰へ、黃興江を下りて上海に走り、黎元洪僅に敗兵を收めて武昌に入りしも、これより兵士逃亡する者多し。

漢陽已に陥落して各省革命黨に及ぼす影響少なからず、武昌ありと雖も兵乏しく兵器彈丸補充の途に窮す、今後の成行知るべきのみ、此時に當りて十二月二日午前十時南京城革命軍の陥る所となり、總督張人駿及び鉄良は獨逸人の保護を受け、而して提督張勳は戰歿したりと傳へられ、或は辛うじて城を脱出したりとも報せらる。

官軍漢陽を陥れ、武昌の死命を制すれば、革命軍南京を陥れて官軍の咽喉を制す而かも此時早く兩軍講和の議あり。

以上は十二月二日に至るまでの經過なり、今後の戦局猶幾轉化あるべしと雖も已に憲法制定の約あり、袁世凱は總理となり各省は獨立す、大勢略定まれりといふも不可なかるべく、今後に於て大戦争の起らんことは官軍兩軍とも資力の許さざるあれば、或は彼の官軍側の楊度と革軍側の汪兆銘が設立せしといふ時事協濟會得意の時代となるやも未だ測り知るべからず、之を要するに今や問題は立憲君主政體か共和政體かとの問題のみとなり、其他の事は官軍共に相一致し居れば一時は此變通機關と袁の政略によりて君主共和政體といふ鶴的政體

を議決するまでに至るべきか。
然れどもこれを以て支那が永久の平和を保つと思へば誤ならん、支那の暗黒時代は一旦の平和ありて後將に來らんとす、最近に起りつゝある平和の傾向は蓋しこれ一段落に過ぎざる也。

第九章 清國現今の人物

第一 故曾國藩

南清志士多く清朝現代の人物、其官革何れを問はず南方の人にして、而して其今日の盛を致せしは實に故曾國藩の力によることは前に已に云爲せり、是に於て現代の人物を評せんとなれば先づ源に溯りて故曾國藩を叙せざるべからず、曾國藩は湖南省湘郷の人、湖南の地たる古荊州に隸し、其鎮は衡山、其澤は雲夢、雲夢は洞庭湖なり、南は嶺に入り西は黔中に接し、苗、獠、獠、獠の種族山谷に錯居して編氓と伍し、俗織約に習ふて勤苦に耐へ、民儒を羞て節に矜り、士は則ち矜々自ら持して喜んで瑋異絶麗の詞を爲す、昔者屈原、此に出で、楚辭天下に布き、朱濂溪

此に生れて理學勃興し海内風に嚮ふて景從す、曾國藩は實に此地に生れしなり、國藩幼にして學を好み夙に明末清初に亘れる湖南の鴻儒王船山に私淑する所あり、長して北京に遊び唐鏡海に學び學德兼備の大人君子として世に畏敬せらる、禮部侍郎在職中母の喪に遭ふて歸郷せしが、偶々長髮の亂起る、國藩慨然として人材擢用の建白をなし、其友新寧の江忠源を拔擢す、忠源楚軍の驍勇を組織し賊將馮雲山を斃して威名大に揚るや、官國藩を起たしめて湘軍訓練の事に從はしむ、國藩三年の喪を終らんとて固辭せしも、郭嵩燾等の勸めによつて驟然として起ち羅澤南の如きは諸生中より塔齊布の如きは卒伍より彭玉麟の如きは藏番より拔擢して何れも大功を建て、國藩至誠盡國の志徹する所引率の子弟皆將相の器にあらざるなし。

中興の諸將多くは國藩の拔擢せし所、其然らざるも皆成を國藩に仰がざるものなし、先づ難に倡へて攻城野戰に偉功を建て後戰歿したる江忠源は其無二の友にして、其二弟忠濟、忠信、族弟忠義、忠珀皆軍功あり、羅澤南は國藩の重する所、其門生を評して理學門下將才多しといひしが果して、羅の高弟王珍、李續賓、續宜兄弟

及び數十百の門弟功拔群なり、劉長佑はこれ江忠源の友、國藩推して戡亂の材ありと爲す、果して忠源殉難後の兵を領し、麾下に劉坤一、江忠義、席寶田の三傑を出したり、其他彭玉麟、鮑超、宋國永、黃翼升、李成謀、劉銘傳、郭松林、李佑厚、李臣典、李祥和、劉松山等湖南出身の名將皆微賤より拔擢せられて功を奏せざるものなし。管に他人のみならず、國藩の三弟國筌、國華、貞幹能く乃兄を助け、就中南京城陥落の如き一に曾國荃の功なり。

然り賊都南京城の陥落は國筌の力なりと雖も其策戦は胡林翼が先づ安慶包圍の策を建てしを用ひしによる、初め國藩が胡を朝廷に薦むるや、曰く胡某の才、臣に勝ること十倍と、已にして亂平ぐや國藩復た功を建議者に推して曰く、中興の功胡林翼を以て第一となすと、其誠忠至公、寸毫の私なきこと此の如し、宜なるかな人々之が用を爲し彼の爲には死を惜まざりしことを。

左宗棠は湖南長沙の人、舉人を以て家に居りしが奇貧自ら活する能はず、長髮の亂密に洪秀全を訪ひしも策用ゐられずして夜に乗じて去りしこの傳説あるも後ち曾國藩に投じて軍に従ひ終に中興の偉勳を奏す、或はいふ左は浙江の人と

其何れにするも南清人たるに妨なし。

明治二十七八年役の後馬關に來りて和を講せし李鴻章は安徽の人、翰林出身にして國藩の帷幕に入り、朝寢を以て毎朝黎明の會食に後れ國藩も其我儘に困りて誠の一字を尙ふべしと誠告せしより、鴻章悚然として志を改め、國藩其才を愛して江蘇巡撫に推選せしに、親ら戰陣に臨みて武翰林の名を得、王皖の策を用ゐて洋兵を用ひ名を常勝軍といふ、髮賊勦定に與つて最も力ありし軍隊なり、李鴻章一たび出で、安徽亦程學啓、劉銘傳、周盛波、盛傳兄弟、潘鼎新、張松珊、吳長慶等を出す、故湖廣總督張之洞も亦李の部下なり。

國亂れて忠臣を思ふ、今や二十一行省、曾國藩の如き人何れにかある。

第一 袁世凱

至公忠正曾國藩の次に袁世凱を叙するは聊か國藩に對する禮を欠ぐの感あれども、現代の人物を評せんには已むことを得ず、先づ指を内閣總理大臣袁世凱に屈せざるを得ず。

袁は河南省陳州の人家は土地の豪族なるを以て若くして素行脩まらず、常に大

酒を蒙つて郷黨親戚に指彈せられ、二十歳の頃叔父袁保齡が天津道臺となれるを便りて寓せしが、改倭の情なきにより叔父は山東省登州の提督たりし吳長慶に托す、吳乃ち張譽なる人を聘して學ばしむるも袁敢て學ばず。彼は中清の人には似もやらず經書を嫌ふて三國誌と水滸傳を好み、軍人となりて長板橋上百萬の兵を睨み殺さんことを夢む、幾もなくして吳長慶、李鴻章の命を奉じ韓國駐兵大臣として京城に赴き、李の幕下馬建忠及び馬良之に従ふ、而して袁も下級軍人となりて隨行したり。

朝鮮に入りてより男兒功名を成すの地と目を付け、京城の事情を搜索し一々上官に報告せしより馬建忠等の用ゆる所となり、馬良天津に赴いて李鴻章に推舉せしより、李之を恭親王に勸めて忽にして朝鮮駐在通商辦理委員となれり。彼れ此位置を利用して公使の實を行ひつゝ、王宮奥く入りて故閔妃と握手す、敢て握手といふは中籌の事を避くる著者の微意のみ。

彼れ當時の朝鮮に對する支那大官の地位に居り、而して朝鮮の女王閔妃に握手す、思ふ所何事か成らざらん日本の對朝鮮策を誇大に報告して李鴻章を驚かし、青雲を踏み外して袁は地に落ちぬ。

明治二十七年東學黨の亂起るや、李を煽動して日清の役を作り、牙山の一敗忽ち支那流に遁走して馬關條約締結せらるゝに及で、心からさはいひながら折角の

閔妃との握手も袁世凱の失敗に終り、此儘埋れ木となると思ひきや、日清の役は痛く清國朝野を刺激しけん、張之洞、張蔭桓、康有爲の徒變法自強を唱へて國政の改革を圖るに及び、得たりとモグリ込で康有爲等と結托し改革黨の一人となりて地歩を占め、天津の一軍を指揮するに至りて袁の名復人口に上る。

當時光緒皇帝治世に志あり康有爲等を用ゐて改革を斷行せんとし、袁に委するに練兵の事を以てす、袁たるもの宜しく皇恩に泣て蹇々匪躬の誠を致すべき也、而も皇帝愈兵を用ゐて宮中の積弊を除かんとするや、統兵の將袁世凱、攝津源氏行綱を氣取り突然裏切りして、西太后派の首領梁榮祿に向つて改革派の隱謀を密告し、憐れむべし改革派は斬らるゝあり亡命するあり、皇帝亦幽閉せられ、袁は裏切の功によりて直隸按察使より布政使に昇任したり。

裏切の功は西太后の信任を得て明治三十二年には山東巡撫となりしが、翌年北

清事變起るに及び李鴻章復彼を召して帷幕の中に參せしめ、事治まるの後彼を推舉して直隸總督となす。

幾もなくして李鴻章死し、彼直隸總督となりて權勢を揮ひつゝ、西太后に握手す敢て握手といふ中籌の事を避くる著者の微意なり、西太后は權則天武后に軼ぎ袁は張易之よりも智者なり。

これより清國の政治總て袁の手に歸し、彼は先づ部下の幕僚を重官に任じ、學校を建て、人材を作り、兵力を收めんとして三十六師團設置を企て、取り敢へず六個師團を設けて部下を以て師團長となし、日露戰爭には日露兩國に好意を表し三十九年清國政府組織改革の時張之洞と共に入て外務部尙書となり、郵傳部を設けて交通機關を收め、又北京天津の警察機關をも收め、幾年の後には國會開設することをまで公にしたたり、而も驕る者は久しからず、さしもの袁世凱も西太后殞落後は時利あらずして反對者の乗する所となり孤影蕭然として故山に歸り悶々の情を風月に遣り置きしが今回の政變により忽にして内閣總理大臣となれり、彼は才あり膽あり政治家としては申し分なきも其節操なき彼の如きは果

して人を服せしむるに足るべけんや。

第三 孫逸仙

孫文乃ち孫逸仙の事は第七章に於て略叙せしが、今少しく前章悉さざる所を補はんか、彼今年四十四歳、身長五尺四寸三分、色黒くして風采揚らず其聲は處女の羞を含むが如く、辯は寧ろ詘辯にして一見平凡なる漢子の如し、而かも彼れ眇たる此一身を以て、四百餘州の運命を擔ひ、今や革命黨の首領として其一舉一動、中外の注目する所となる。

彼少時布哇に遊びて文明の新空氣を吸ひ、歸來廣東に遊んで鄭歐と交を締び更に轉じて香港に遊學し、博濟醫學校にありて學僕をなし苦學しつゝある間に揚飛鴻、陳少白、尤列などの同志を得、葡萄牙領澳門にて醫術を開業せしは前章已に述べし所なるが、彼は此間に於て同志を糾合し興中會を起して、三合會と相應じて廣東省城を乗取らんとし、事敗れて陸皓東以下の戦死となり、身を以て日本に脱れて以來世界を漂流し、今に革命の爲に盡しつゝあるは亦前章述べし所なり。

彼は外國に於て多くの知己を有す、佛國大統領クレマンソー氏、前佛領印度總督ズーメー氏、英國のサリズベリー侯、米國のルーズベルト、我が故陸軍大將兒玉源太郎氏を初め各國知己の名士殆ど枚舉に遑あらず。彼平常讀書を好む、其醫學博士の肩書を有して西洋醫學の造詣に深き事は言ふ迄もなく、百科の書一通りは知らざるなく特に外交史を愛讀し國際公法を研究し、奈烈翁傳を好むは其革命思想の好尚と志成りて後の用意ならん。聞く彼は亦戰術家にして今回の革命軍、孫が嘗て劃せし戰略に遵據せしもの多しといふ。

第四 黃興

黃興名は軫、字は克強、湖南府長沙に近き某縣素封家の長子にて今年三十七歳、身長五尺三寸八分、体量十九貫八百を有す、性質卒直にして寛仁大度能く人と交はる、壯年の頃張之洞の創立せる兩湖書院に入學し、明治三十二年其二十五歳の時唐才常等と共に湖南に於て暴舉を企て事破れて日本に亡命して學窓の人となり、拒俄團なる露人排斥の支那人團體の巨魁となり、二十八歳の時長沙に歸りて

私學校を建て、革興會なるものを起して劉揆一、陳天華の徒と擾亂運動に従事し、明治三十七年十月哥老會の頭目馬福益と結托して西太后の萬壽節を期して大舉天下を亂さんとせしも復成らず、上海に遁れて捕へられ獄裡に繋がれしも友人の情によりて逃走し、再び日本に亡命して留學生に革命思想を注入し、此年米國より再來せし孫逸仙と會見し中國同盟會を組織して革命を傳道し、更に十八省に支部を設けて大舉傳道し、孫逸仙と左提右携して、明治四十年には欽州にて四十一年一月には鎮南關にて、同年五月には雲南河口にて各小暴動を起さしめ、雲南にては黃興自ら軍を指揮せしも終に敗れ、一昨四十二年安徽事件起りて美人秋瑾女史刑場の露と消わし件にも關係し、昨年廣東新軍を指揮して反亂を企て、此時亦黃興自ら陣頭に立て兵を指揮せしも復成らず、今春廣東城の暴發に失敗し、終に今回の革命亂に乗じて、今や總革命黨の首領となるに至れり。

第五 黎元洪

中華民國軍の總指揮官革命黨の巨魁黎元洪は湖北省黃陂の産にして今年四十七歳、幼にして北洋海軍學堂に入學し、同學堂を卒業し日清戰爭後大に日本軍隊

組織の完美なるに感奮し、率先して日本に留學し陸軍士官學校に螢雪の功を積み、業成つて後張之洞の拔擢する所となり湖南特別學堂の監督となり更に第十混成旅團に統領(旅團長)となるに至る。是に於て乎彼は知己に感じて張之洞に仕ふる事極めて從順、傍ら益泰西の戰術を研究し外國語を學び新智識を得るに汲々たりしが、鐵道問題起るに及び奮然湖北の野に於て獅子吼を爲し國有に向つて極力反對す、武昌には成立せる軍隊と半成立の軍隊とありて、成立せる第八鎮には張彪統制(師團長)として立ち、半成の十一鎮には黎元洪旅團長として臨みしが、兩軍の兵士皆悉く黎を慕ひし結果、今回の變亂に兵士より推されて其統率となるに至れり、彼は英語に巧にして在留外人にも知己多し。

第六 湯化龍

革命軍民政長官湯化龍は湖北蘄水縣の人、曩に進士館より官費生に選拔せられて我東京に來り、法政大學に入學して専ら梅博士の教を受け、速成科を卒業して去る四十一年中に歸省す、今年三十五歳なるも清國人中稀に見る人物にて又刑法學者たり、其日本留學中刑法學に關する一書を著して清國學生の指導に使せ

しことは人の知る所、歸省後民政部主事の任に就き、其後湖北諮議局長に任せらるゝや、現政府の施政を非となし、今春副議長張國溶と共に湖北軍商學界公然の代表者として北京に赴き、現代皇族内閣を彈劾せしも容れられず、却て不謹慎なりとて、疎外せられたるを以て大に憤慨し、今回北京に來りしは一個人として來りしにあらず、湖北各階級の全部を代表し來りしなれば、何の面目ありてか此儘歸省すべけんやとて、各省諮議局議員を北京に集合し、各省諮議局聯合大會の名の下に極力皇族内閣の非を鳴し建白書を上りしも容れられず、怨を呑で北京を去り爾來數ヶ月間、湖北の地にありて革新の時機を待ちしが、今回武昌の變に起ちて民政長官となりしなり。

以上の外官革共に風雲に際會して功名を成さんとするもの數ふべからざるも今主要の人を列舉し終りたれば、他は之を略することゝしたり。

第七 康有爲

袁世凱、孫逸仙、黃興等が活動する時に當りて須磨の浦曲に閑居して革命の政變を知らずげにある康有爲は如何なる抱負を抱きつゝある乎、事は未知數に屬し

て今より豫言すべからずと雖も、已に他の諸人を傳せし上は亦康有爲を傳せざるべからず。

康有爲は世の所謂康南海先生にして、廣東省南海縣の人、夙に温和なる清國改革の政策を持し、日本の吉田松蔭に私淑し、其松下村塾を學んで郷里に「禹本草堂」なる小なき塾を建て、梁啓超以下天下の秀才を集めて風雲の到るを待つ、會々故光緒皇帝人材を天下に募り、康を拔擢して樞要の位地に置く、彼れ是に於て皇帝の知遇に感じ、肝膽相照して世の所謂變法自強の策を建つ、然るに此事守舊派の喜ばざる所となり、西太后を擁して皇帝の策に反對するに及んで、宮中は西太后派の守舊黨と皇帝及び康一派の改革派と陰然相争ふに至れり。

康は宮中の險惡日に加ふるを見、大事を決行せずんば到底改革の行はれ難きを察し、明治三十一年(光緒二十四年九月)皇帝に奏して西太后を圖らんとし、皇帝は「卿は朕を以て不孝の子となすか」と宣まひて一旦拒まれしも、先んせざれば却て廢帝の運命を見んとする危急の場合なるを聞て已むを得ず、これを允許したまひ、康は宮中の兵力が西太后の股肱榮祿の手にあり如何ともすべからざるより

外來の兵を借らん爲め、天津に急行して當時直隸總督たりし、今回滿朝政府の大立物袁世凱に會見し、其謀を告げ之が同意を求めしに、袁は之を快諾したり。

袁は已に快諾せり、康は事の成るべきを信じたり、然るに動變多き袁は心機一轉して密使を榮祿に馳せ、事の次第を西太后に密奏せしめたり、是に於て西太后大に怒り、即刻榮祿に命じて光緒帝及び康有爲追捕の命を下し、皇帝を捕へて太液池なる瀛台に幽す、當時康も泣て従はんとせしを皇帝諭して逃れしめ、康は涙と共に鬪を辭し、身を以て天津に免れ、天津駐劄本邦領事鄭永昌の助により本邦汽船に隠れて英國に遁れ、尋て我邦に渡航し、以て今日に至れり、當時若し革命成りしならんには、支那は今日の動亂を見るに至らざりしやも知れざるなりしに、惜むべし、守舊派の頑冥時代の推移を知らず、以て今日に至らしめたり。

第八 盛宣懷

革命亂の當初、資政院の議決によりて放逐せられたる盛宣懷は如何なる人ぞ、彼は本年一月上旬郵便部尙書となり、次で内閣官制の發表と共に清國最初の郵便大臣として、快刀亂麻を斷つの手腕を發揮し、他の閣員をして眼色なからしめし

も、外債政策によりて先づ多数の反対を招き、次で其畢生の事業たる鐵道國有案によりて清國朝野の怨府となり、四川暴動、湖北の革命亂、資政院の彈劾等幾多の事情錯綜して終に革職を命せられたるものなるが、彼は、大野九郎兵衛の如く非常の時には役に立つ男ならざるも、財政經濟の道にかけては四百餘州廣しと雖も、彼と肩を並ぶるものなく、流石の李鴻章さへ此點に於て常に彼に一籌を輸せし程にて、其今日まで清國の財政問題に就て發揮せし例頗る多く、彼の有名なる大冶鑛山を張之洞失敗の後を整理して一時監況に向へしめし如きも、其一例にて従つて公債募集、武器買入等常に彼の手を煩はし、其度毎に彼自身を利益すること少なからず、延て清國大官の嫉妬を買ひ、衆毀の集まる所終に資政院の彈劾となりしものなり。

而して彼が清朝廷より放逐されし時、各國ともに之が保護の引張風をなせしは一見奇妙の觀ありしも、其實四國借款の人質を得んが爲に外ならず、蓋し彼は四國借款の本調印を爲し居れば也。

彼は袁世凱と快からず、久しく袁の厭迫を受けて志を得ざりしを以て、嘗て六十

萬兩を懐にして天津に赴き、當路に贈賄して袁排斥の運動を爲せしことありしも、當時袁は西太后の親任を厚ふせし時なりしを以て、其運動は何等の功をも奏せざりし事あり、今回の革職亦袁が出慮の前提として已むを得ざる事情もありし也。

然れども彼が經濟上の活動力は外國商人及び豪商連に評判よきを以て、清國將來必ず起るべく、財政窮乏整理には必ず彼を要すべきを以て、彼や再び廟堂に立つべきの時あらん。

第九 岑春煊

清國の政變が如何になり行くにせよ、將來最も望みを屬すべきは四川鎮撫の任に當れる岑春煊なるべし、彼は名門の出にして夙に令名あり、往年義和團匪の起りし時、山西巡撫として太原府にあり、當時各國聯合軍の攻撃により、北京城陥落し、西太后、光緒皇帝を促して北京を落ち、保定府より直隸省正定府に走り、更に山西省太原に通るゝや、岑春煊忠勤最も勉め、帝及び西太后を奉すること懇懃なり、是に於て乎、歸京の後彼の誠忠を嘉し、君寵最も渥く、太子少保の名譽ある稱號を

賜へり。

然れども彼は天性極めて豪邁にして容易に人に屈するを好まず、郵傳部尙書として召されて北京に入るや、北京政界の腐敗を一掃せんとして慶親王以下を弾劾する等北京政界に大波瀾を惹起し、爲に政敵の陥る所となり其爪牙にかゝりて一時北京を追はるゝに至れり。

而も彼が不世出の英材は夙に官民の畏敬する所、曩に四川の亂起るや朝廷之を鎮定するの策なきを苦しみ、上海に仰臥せる、彼を起して此大任に當らしめんとし、彼亦其友人の制止を肯せず甘じて此任に當り、先づ遙に書を四川なる父老子弟の許に送りて、其輕舉を戒めし結果、四川は今や稍小康の姿を呈しつゝあり、彼は政敵多しと雖も其偉大なる人格を崇敬するものも多く、特に江南有爲の子弟にして曾て我日本に留學せしものに、彼に隨從するもの頗る多く、機を見て彼を擁せんとするの氣、江南一帶に満てりと聞けば、將來大飛躍を爲すべき資格あるものは夫れ岑春煊乎。

第十章 清國政局の前途

第一 醇親王の攝政辭職

南には中華民國の創立あり、北には内閣總理大臣袁世凱の政見發表あり、講和全權大臣唐紹怡、參與大臣楊士琦、嚴修、已に京を發して官革兩軍の主張其差幾くもなく、攝政王亦時代の要求に餘儀なくされ、今年僅に六歳の幼冲皇帝を國母劉裕皇太后に任せて退位せらる、上諭に曰く、

監國攝政王隆裕皇太后の懿旨を奉じ攝政王而奏す攝政以來今に三載人を用ひ政を行ふ多く輿情と違ひ立憲徒に久遠に屬し弊害是より起り人心瓦解、國勢土崩を馴致し一人を以て處置當を失す而かも全國の生靈を慘禍に陥らしめ傷心するも亦既に遲し國民の信用を失して國政を攝行することも詔令既に効力少し政治曷ぞ改良を望まんや泣いて監國攝政王の位を退き再び政治に干與せざるを請ふ其の情思切實至誠より出づ余宮中に深處し未だ大政を聽かず祇だ武漢事起て各省響應し兵亂結んで解けず滿目の創痍既に深く友邦

の商業亦影響を受く一念茲に及ぶ毎に寢食安らず亟に内外の状況を察し國を安ずるの鴻猷を定むべしと監國攝政王謹慎治を圖れるも効之に副はず請ふ所の退位を允す攝政王鈐する所の章印は之を納め王は藩邸に歸り再び政に與らず依て年俸銀五萬兩を賞給し皇室經費の下に支出し從來の人を用ひ政を行ふ事均しく總理大臣、各國務大臣の責任とす有ゆる發布の詔勅は御璽を用ひ謁見の禮は余皇帝を奉じて行ふべし皇帝尙幼冲保衛の責身親ら之に當り世續及徐世昌に太保を授け心を竭くし衛護すべし現在四方多難諸王公等休戚を同うし國利民福を計るべし我が國民に朝廷君權を私せざるを知らしめ以て紛争分裂の禍を免れん事を冀ふ

醇親王、攝政王となりし以來今に三年、戰兢已を持ち政に勉め事を勵み、尙且今次の奇變に遭遇し、終に責を引て自ら攝政を辭するに至りたる、實に一大悲劇にして、劉裕皇太后垂簾政を聽くといふと雖も唯これ形式の上のみ、今や滿朝廷三年の運命風前の灯に等しからんとす、誠にこれ危急存亡の秋なり。

第一 今後の政局

滿清朝廷の滅亡は悲しむべきが如しと雖も、若しこれによりて四億漢民族の擾亂自滅を防ぎ得んには輕重大小に於て悲むべからざる如し而も予を以て之を見れば禍亂これより愈々長く且大ならんとするが如きを奈何せん、

清國現下の政治主義者に於て表面に顯れたるもの三あり、一は保守派にて滿朝政府の舊官吏に屬す彼等は其思想感情より袁を目するに不具載天の讐を以てするあり、權力争奪の關係より併立する能はざるあり、此等が袁の活動を不快とするは勿論なれども、大勢の趨く所如何ともすべからざるより、暫くこれが推移を傍觀するも一朝機熟せんか、起つて權力挽回の方法を講すべきは無論にて、此輩の後には衰へたりと雖も滿洲四百萬人の多數あれば、決して輕視すべき團體にあらざるべし。

二は武昌より起りて天下を席捲せる革命黨にて其着々成功せるは言ふを須たず、然れども此革命黨中二派ありて、孫逸仙一派の極端なる革命主義者と黎元洪一派の革命主義者に分つ、後者は袁世凱と陰約の脈絡あれば妥協の見込あり前者は少數なれば遂には失望する時來るべきか乎。

第三は急進的進歩主義と稱するものにて、保守的なる北京政府と過激なる革命黨との間に居りて、民主的君主々義又は急進的進歩主義とも稱すべき一種の信條を有し、清朝を奉じて民主政治を行はんとする理想にて此思想は軍隊にも官邊にも資政院にも波及し居り袁世凱の機敏なる此主義に注目して、自ら急進的進歩主義となり、今や明かに政見までも發表したれば、新内閣の主義と見るも差支なからん。

以上四派の消長昇沈今より豫言すべからずと雖も、今の處にては保守派屏息し極端なる革命派は人少なく、武昌の革命黨は妥協の望みあり、結局袁一派の急進的民主々義の成功に歸せんか。

去りながらこれを以て袁の奏功と思へば誤見なり、革命黨も保守黨も左右並び立つ時遠からざるべく、袁は此時板狭みとなるの日あらん。

支那は由來英雄氣取りのもの多き國也、而して袁世凱は歴史的に革命黨及び立憲黨に嫌忌せらるゝ人也、袁の今唱へつゝある急進的民主々義の熱心家は、袁に非ずして却て彼が爲に賣られたる康有爲、梁啓超一派なることを忘るべからず。

保守派袁へたりと雖も、亦猶慶親王、載澤公、端方、蔭昌あり、近時資政院に人物乏しく、不平の徒は太抵各省の郷里に就て其根底を固むるもの多く、此等の有志は政變後多く上海に集り、畫策する所あらんとするものゝ如く、而して上海の岑春煊、兩廣總督の張鳴岐、雲貴總督の李經義等は、此等有志の望を寄する所にて、而して此等岑を奉ずる江南有志は袁と相容れず、岑亦袁が朝廷にある限りは決して出でざるべし、況んや革命軍の孫逸仙、黃興一派も黎元洪一派も袁の從屬にあらざるをや。

康有爲、梁啓超、慶親王、載澤公、端方、蔭昌、岑春煊、張鳴岐、李經義、孫逸仙、黃興、黎元洪、何れも皆袁に取りては油斷ならざるものにて、革命軍に與らざる他の諸氏と雖も、機會來らば蹶起するに難からず、袁も亦殆い哉。之を要するに支那の前途は輕々に樂觀し去るべからざる也。

第十一章 結論

上來支那五千年興亡の跡、披摺し來つて、長大息を禁じ能はざるものあり、於戲一

夫時に乘じて兵を發すれば、風聲鶴唳、到る所驚呼し、烽火の天に轟くを瞻れば、光り、赤幟を搖がし、妖氛の地を匝るに駭けば、勢ひ黃巾を湧かし、變非常に起り、禍不測に生ずるは抑何の故ぞ、君主共和の名分論か、あらず、立憲專制の政治學か、あらず、滿漢華夷の衝突か、あらず、樹つる所の名義は何ともあれ、國貧しく民疲れ、山河徒らに在つて滅亡日に近づくもの、これ内憂の起る所以にあらずや、況や官威太だ峻にして民命堪む難く、榜掠嚴にして脂膏を竭し、毒は永野の蛇に逾り、猛は泰山の虎に過ぎたるをや、加ふるに天災數々臻りて民生を樂します、向には死を畏るゝの心存して尙法紀を知る、今は生を求むるの路絶つ、豈身家を顧んや、隄は防を失して驟かに城を漂はすに至り、薪徒らずして倏ち焦土となる、孽氣騰つて愁雲半ば黒く、陰風熾にして冤血全く紅なるに至ては何等の慘事ぞ、

之を治むるの法如何、老子曰く、上徳は徳ならず、是を以て徳あり、下徳は徳を失はず、是を以て徳なし、法令滋々、章にして盜賊多く有り、と、苟くも徳を脩めずして徒らに法をのみ變じ、以て民意に迎合せんとせば、これ其皮膚を美にして肉の腐れたるを忘るゝもの、今次の變亂、設ひ一時の段落を告るも、豈禍亂を永遠に止め得

らるべけんや、一難去りて一難來り、官民共に應接に耐へず、終に相伴ふて滅亡するに終らんのみ。

而してこれ天涯萬里の遠きにあらず、一葦帶水の隣邦なり、唇亡びて後齒豈獨り暖かならんや、啻に國家のみならず、我實業家に至ては、其利益損害常に清國の治亂と消長す、果して然らば、吾人實業家たるもの、清國官民治亂の往を尋ね來を推し、以て不時の用意と之が救済の法を考へざるべからずして、予が本書を草せし微意も亦これに過ぎざる也。

然らば則ち清國官民が爲すべき治案策は何若、夫れ唯一の誠乎、人若し誠なれば、天下何者か我黨與にあらずらん、人若し誠ならざれば、一室の内誰か我敵にあらずらん、これ曾國藩が功を奏せし所以の道也。

231
6

明治四拾四年十二月二十五日印刷
明治四拾四年十二月二十八日發行

(非賣品)

不許
複製

著者 加藤正雄

大阪市東區島町二丁目十一番屋敷

發行人 三浦 檜 義

大阪市南區高津十番町十八番地

印刷者 矢尾彌市郎

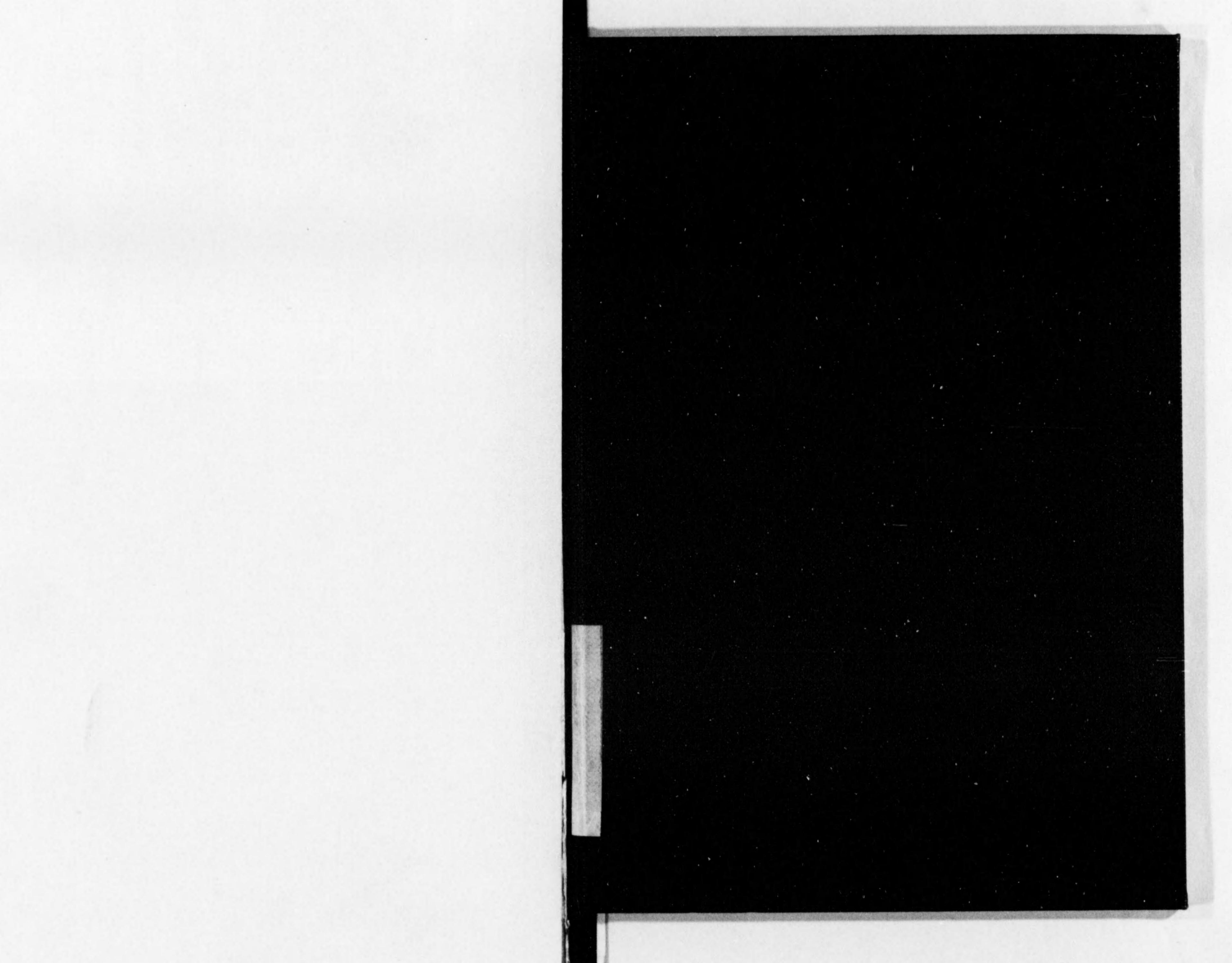
大阪市西區江戶堀上通二丁目百十二番屋敷

印刷所 矢尾弘文堂

大阪市西區江戶堀上通二丁目百十二番屋敷

파 2D-14





222.06
Ka64/s

Ⓜ

003042-000-4

222.06-Ka641s

最近清国動乱史

加藤 正雄/著

M44

ACC-0468



